391
139
6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7
北

391-137

佐藤紅緑著

微笑

文芸社版

大正
9.7.21
内交

微笑

一　兄と妹

佐藤紅緑著

萬山の緣を絞る清水は青苔の花咲く岩を滑らかに過ぎて曲り角や出しやばつた岩に白嚙き時には無遠慮な木の根をちよいと濡らして又たさつ〳〵と下り行く。透徹る水底にも居れば恐ろしく疾く過ぎる小魚も見える。頭の上は恰らに天蓋を擴げた樣な樹木〳〵茂りて樹はどれも〳〵一ぱいに枝を伸ばして此の生新な大地に呼吸を吐いてるかの樣、箕面の山はからねど幽邃の趣は又とない。

「あはれゆかしき歌の調よ、ゆ

岩角に腰を掛けて眞白い足を水に浸しながら胸を充分に張つて唄ひ出す木々の谺は遠近から返して來る。晶子は暫時唄を止めて凝と谺を聞いた。而して足で水をぽちやぽちやさせ乍ら今度は只だ「あゝ」と叫んで見る。谺は二三箇所で「あゝ」と應へる。「ソラシド」と叫ぶ。谺は少し間喰つてごちやごちやとしたが終りの「ド」だけは永く永く響く、晶子はにつこりと笑つた。而して四邊を見廻して嫋やかな指先で廂の髪を拂ひ上げた、額はくつきりと白く、無雜作に垂れた髪は艶やかに其の瓜實形の豐かな頰を夢見る樣な涼しい眼に能く調和して居る。彼女は麻形の浴衣を膝まで捲くり直して再び唄ひ初めた。

「あはれ床しき歌のしらべよ」

「ゆうべ遙かに胸にきけば・・・」

「あらッ」と晶子は吃驚して水の中に立た。水はちよろ〳〵とふくら脛を繞つて走つた。

「歸つて被來したの？」

「あゝ今ま歸つたよ」

表面に日光を浴びて下に濃い影を落して居る若楓の間に夏帽がちらと見えた。晶子が

左の足で右の足を洗ひながら捲り上げた裾を直しながら、私明日だと思つて居ましたわ」

「晶さんに會ひたいもんだから裾野へ寄らずに來たよ」

「あら嬉しいわね」

「何をしてるんだ」怎う言て五郎は岸に立つた。

「足を冷やしてるのよ、熱つて仕樣がないんですもの」

「馬鹿だね、滑つて轉んだら什麼する、全然鷺の樣な、水の眞中に一本脚で立てるな

「兄さんの樣に長い脚でない

「馬鹿ッ、長いから草臥れると決まつてるもんか、早く出て御出よ」

「今考へてるのよ」

「何を考へてゐるんだ」

「兄さんに彼處の岩の處まで私の草履を持つて行て貰はうかしら、但しは失禮に當るかしらと」

「呆れた奴だ」と五郎は笑ひながら晶子の脱ぎ捨てた草履を二三間下に運んだ。

「濟みません兄さん」と晶子は矢張り裾を捲つたまゝで草履を穿き、

「兄さん半巾！」

五郎は袂から半巾を出してやるとそれで脚を拭いて漸と裾を下し、

「兄さん御機嫌宜しう」

「勝手な奴だな」と五郎はにこにこして妹の顔を見戍り「高井も八並もよろしく言つてゐたよ」

「あゝ爾？、高井さんは什麼して？」

「伴れて來やうと思つたけれども彼奴も妹思ひなんだからね、町子さんの病氣看護に田舍へ歸つたよ」

「あら町子さんは御病氣？」

「あゝ大した事はないさうだよ」

二人は齒朶の葉が凉しく重なり合つてる木下路をだら〳〵に下りながら小さな瀧壺の前に出た。頭の上に小鳥が境閑に囀つてゐる茂りの向ふは丘で、丘は午後の日光に輝いて見える。

「兄さん御父さんは？」

「居るよ」

「お一人？」

「いや客來の樣だ」

「誰方？」

「誰だか知らんが多分お前のお嫁貰ひだらう」

「いやよ兄さん」と晶子は眉を顰め「兄さんまで私を馬鹿にしてるわ」

二

五郎は今年二十三歳身の丈五尺五寸といへば大男の部に屬する、顏は長く眼凉しく色黑く、し痩ぎすの肩幅が廣く白飛白の着流しに黑めりんすの兵兒帶を背後に結んで竹の根の洋杖を持つて居た。誰しもよくある事だが、一つの學校を卒業して次の學校に移る時の心持は希望と矜持とに天地の凡てが輝いて見える、況んや五郎は第一高等學校を卒へて愈々文科大學に進みかけたのである、彼は見るもの每に樂く聞くもの每に樂かつた。今愛する妹と久し振で此の別莊で一年間の積る話をするといふは、彼に取て更に大きな樂みであつた。

何が美しいと言つて靑春時代の感情ほど美しいものはない、友人兄弟姉妹、其等の淸い溫かい美しい愛情は特に學生時代に其の光が强烈なのである。殊に五郎は晶子を愛した、晶子も亦た五郎を愛した。二人の愛の上に更に父の隆二の愛が加はつた。母は佛の樣な人好で、二人の子供を愛するともなく愛せぬともなく一寸其の程度が解りかねる質だが、平生大きな聲で人を怒鳴た事もなく、何事に就いても感情を外に露はす事がないのを以て見ると、矢張り子供を愛

してるのだが表情に乏しいのだといふ結論に歸着する、彼女は凡てに鷹揚で遲鈍で正直で、年を老るに從つて身體の脂肪が多くなるので、こんなに肥つては困る〳〵と言ひ〳〵しながら仍且ずん〳〵肥つて行く、それと同時に居眠りが名人になつて屢二人の子供に惡戲をされ大島家の滑稽役者となつて笑話を製造して居る。

「隨分面白い話があつてよ兄さん」と晶子は語らぬ先に獨りで笑ひ出した。

「お母さんかへ」

「あゝ爾よ」

「はゝゝゝ」と五郎も聞かぬ中から笑つた。

「頃日ね、お母さんはお晝寢をなすつて被居たのよ、すると御父さんが縞と來てさに立てゝ枕元に御線香を立てゝね、屏風の陰で御經を御讀みになつたのよ、す御母さんが御眼覺になつて、きよろ〳〵と四邊を見廻してね、晶子や〳〵と私をのよ、はいと言ふとね、私は生きてるのかへ死んでるのかへと仰有やるのよ、御」て被居やるわと言ふとね、爾だらう私も生きてる樣な氣がするよと仰有やつたな

ろりと横になつてぐう〳〵眠つてしまつたのよ」

「はゝゝゝ其奴あ面白い、はゝゝゝ」

「可笑しかつたわよ」

如何なる家庭にも他人には解らぬ滑稽談や逸話がある。中にも春風駘蕩として他所目にも羨ましき大島家には兄妹が仲が好いだけに二人だけの面白い話が澤山にある其れは重に父や母に關する事柄であつた。

怎ういふ家庭の麗かな話を語り合ふ事は恐らくは人間の至美至醇なる樂みであらう、二人は流れに沿うて行き橋を渡り濃かな葉蔭を辿り行くと水勢次第に衰へて、美しい小石を敷きつめた、小流に出る、其處は最早や座敷に近い泉水で、泉水は殆んど天が見えぬまでに蔽さつた若葉青葉で圍まれてあつた。と晶子は急に立停まつて五郎の袖を惹いた。

「なんだい」

怎ういふと同時に五郎は泉水の汀に立てる一人の人を見た、年は最早や五十五六鼻が馬鹿に大きく其と釣合つて額が馬鹿に廣い、廣い額から腦天に掛けてつるりと禿た赭色の上に極めて

輕少な髪の毛を一本々々四方八方から撫で集めて軒に月漏る破れ簾、苦心慘憺の頭である。彼は今ま泉水の水鏡に映して竊と簾を修繕しては四邊を見廻して居る。

「うふゝゝゝ」と五郎は手を口に當て笑いたさを怺へた、が晶子は怺へきれぬ樣に眞紅になつた。

「何とか言たねあの人は。」

「奥田さんよ」

「爾々爾だ、始終妾を圍つては逃げられてるんだ」

「あの息子さんはもつと可笑しいのよ」

「お前を嫁に欲しいと言たとかいふんだらう」

「爾よ、隨分圖々しいわね、あら來たわ、御覽なさい、宅のお鶴はねあの人をリンと號けたのよ」

二人が語つて居るのを早くも見付けた和製のチャップリンは頸帶を氣にしながら靴の閃めかして可成く脛を眞直にする樣に突張りながら小橋を渡つた時、破籠の父は吃驚して水を止めた。

「待たよ富男」

「爾うですか」と富男は遙かに晶子に會釋して、

「實に嚴しい暑さですな、新嘉坡以上ですよ」

「彼方は、其那に凌ぎよいかな」

「いや暑さは暑いですが、朝晩に折々の驟雨がありますんでな、無論新嘉坡は御承知の通りの半熱帶國ですから」

怎う言つた時、晶子と五郎は側近く通過ぎやうとした。

「いや御嬢さん今日は」と富男は妙に黃色な聲を出して父に似た大きな鼻を手巾で拭き「あ、

三

五郎さんでしたね。暫く御目に掛らない中に大變御變りになりましたね」

「富男君でしたね。久濶！」と五郎はぶつきら棒に答へた。

「先々月歸朝しまして御父樣の御世話になつて居ます」

「何處へ行つてたんですか」

「何處へつて貴方」と富男は苟くも奥田富男が新嘉坡へ洋行した事を知らぬとは以ての外だと思ふかの樣に眼をぱち〳〵させて「新嘉坡です」

「はあ爾ですか、新嘉坡といふ處は詰らない處ださうです」

「詰らないと言へばまあ爾ですが金は儲かりますぜ」

「あゝ爾だつた。君は移民を連れて行つたのでしたね。移民會社といふ奴は隨分日本るさうですね、君の會社は什麼だか知れないけれども」

「私の會社は、そ、そ、そんな事は」と富男は又もや手巾で鼻を拭いた。兄の五郎言葉を晶子ははら〳〵しながら聞いて居たが軈て向ふの花畑にダリヤが咲き滿ちて是れ幸と言葉を移した。

「斯嘉坡はダリヤが元祖ださうですね」
「あゝ左樣、ダリヤは實に美しいのがあります。併しダリヤといふ花は私は好みません」
「何故ですの？」
「あれは浮氣者といふ花言葉になつて居ますよ。亞米利加でも英吉利でも花言葉と申しまして一つの花に一つの意味があると言ふのです。つまり紫陽花は薄情だとか、山吹は忍耐だとか、蕣は無邪氣で、水仙は自尊で、中には白百合！これは御孃樣の樣な純潔な方を代表しますしスカビオサ！これは私に似て居ますよ、果敢なき戀と申しましてな、ハゝゝ」
「薄つぺらで小利巧で横着者だといふ花は何かね」と五郎は突然横合から言つた。
「はあん」と富男は一寸躊躇して、
「爾いふ亂暴な意味を外國人は花に寄せないでせう。文明人ですからね」
「新嘉坡は文明かね、晶さん行かう」
五郎はふいと立去つた。後に從いた晶子は漸く五郎と肩を並べ、
「兄さん隨分酷い事を言ふのね」

「些と酷かつたかね。併し僕は彼奴の顏を見ると喧嘩を吹掛けたくなるんだ。世の中に彼奴ほど厭な奴はないね」
「どうして？」
「天下の利巧者は私でございと言ふ樣な顏をしてるぢやないか」
「だつて本當に利巧なんでせう、御父樣も賞めて被居つたわ」
「凡て利巧な者は老人に好かれるよ。正しい者は青年に好かれる。お前は何方が可い」
「利巧で正しい人が好きだわ」
「それぢや兄さんの樣な人だね」
「兄さんは嫌ひよ、亂暴ですもの」
「正しいから亂暴なんだ」
「そんな論法はないわ」
恁う言ひながら芝生の上を歩いて居る處へ突然父の聲が聞へた。
「おい晶子、早く御馳走を持つて來い」

「お前もお酌をするんだぞ、はッはッ」と異つた聲がする。其れは父と差向に碁盤を狹んで坐つて居た楠侯爵であつた。

四

晶子は幼さい時から楠侯爵を知つて居た。其れは幾歳の年からであるかは明瞭しないが、其の大黑樣の樣に四角な顏や何時でもにこ〳〵してる事や、又降つても照ても外でも內でも詰襟の軍服を着てる事は始から終まで一貫して居る。何でも五歲位の時に侯爵は門の前に遊んで居る自分の頭に大きな手を載せて「小父さんは戰爭に行くから死んだら御饅頭を手向けてくれ」と言つた事を記憶して居る。抱てくれたり背負してくれたり、髭だらけの口を開いて珈琲茶樹をふう〳〵吹いて冷ましてから飲ましてくれたりするので晶子は何時の間にか此の小父さんが好になつた。

「小父さんは宅の親類なの？」と彼女が母に訊いたのは十二三の頃であつた、其の時母は怎う答へた。

「親類なんて勿體ない事を言ふものではありません。陸軍大將で侯爵樣ぢやありませんか」

とは言ふものゝ大將で侯爵たる人が來る度に宿まつたり、お酒を飲んではその儘にごろ寢をしたり自分に冗談を言つたり、お客を澤山に連れて來ては御馳走をしてやつたりするとは餘りに親密過ぎると彼女は思つた。

のみならず自分に對しても殆んど我が娘でゞもあるかの樣に「おい晶子、お酌をしろ」といふのも不思議の一つである、併し此の疑は程もなく解けた。其れは新聞に侯爵と父の惡口が出て居たからである。其の記事に依ると父は侯爵に取入て盛んに銀行會社を起して不正な榮華を極めて居るとの事であつた。此の記事を讀んだ時彼女は或は此の通りだらうかと思つた。そこで兄の五郎に訊ねた。

「兄さんは什麼思つて？」

「馬鹿な事を」と五郎は一言の下に打消した。

「父は正しい人だ、侯爵は父の正義を信ずればこそ親密にして居るんだ。世間や新聞利害や嫉妬や政黨の關係からして種々な事を言ふ。其の度毎に父を疑つては濟まな

いか」

いかにも爾だと晶子は思つた。而して侯爵が陸軍大臣になつた時も心の底から嬉しく思つたが晶子は侯爵に嫌ひな點が一つあつた、其れは何時までも自分を子供扱にして、餘計な事にまで干渉する事であつた。

「學校を勉強しろ、友達にどんな人があるか、何時に起きて何時に寢るか、小説や芝居なぞ見ちや不可、和歌と琴と茶の湯をやれ、薙刀を稽古しろ」

種々な質問や訓戒や注文やを受ける度に腹立たしく又氣の毒にも思つた。若し通例の間柄であつたら陸軍大將大勳位侯爵の御言葉がいかに畏く思はれたであらう。併し幼少から珈琲を吹いて飲まして貰つた小父さんだから親しみが深いだけに「舊式の禿頭」位にしか思はれなかつたが毎も頭を掉つて斷つてくれた事であつた。

「其奴は不可」もつと適當な男がありさうなものだ」

小父さんの言葉に對して父は決して逆はなかつた。

「私も爾う思ひます」

親類以上の親しい間柄でありながら父は決して禮義を素さなかつた。侯爵も亦た軍人気飾り氣ない擧動はあれども父に對して謹嚴であつた。

晶子がお膳を持つて座敷へ行つた時侯爵と父は碁盤の上に擴げた地圖を疊んだ。二人は打て居たのではなかつた。

「好し〳〵、御馳走にならう」と侯爵は言つた。これは侯爵の口癖である。而してにこゝて晶子の顏を見やり「お前にお酌をさせるのは私ばかりぢやろ」と言つて

五

色が黑いので侯爵の酒は色に出なかつた、併し醉うて來ると詰襟服の上順に外すのが例であつた。これを御酒のメートルと稱した、二本目位から子が重なると終りに全部を外して圓々とした腹を突出す。

「處で大島さん晶子も中々美人になつたが其後候補者が大分出來ましたか

恁う言つて侯爵はビールをぐつと嚥み干して更に晶子に波々と酌がせ「お前、けんと御父様が心配するからのう」

晶子は例の十八番が始まつたといふ樣に眼を侯爵に向けて微笑して俯向いた。

「いや笑ひ處ぢやないよ」と侯爵も笑つた。

「其れに就ては其のう」と隆二は頗る眞面目な顏で「別に思はしい處もありませんが、實に田の忰が米國から歸りまして過日から晶子を嫁にといふ話がありますので」

「奥田？」と侯爵は首を傾けて「どんな男だつたかな」

「私が名古屋鐵道の方を任せて置きました男で」

「あゝ〳〵中々敏腕家だ。あれの忰の嫁に欲しいといふのか」

「爾です」

「どんな忰だ」

「侯爵に一目なりと御目に掛りたいと申しますので彼方に待たしてあります」

「呼べ〳〵、どれ私は花婿試驗委員長だ。晶子御禮を言へ」

「はい」と晶子は顏を染めて笑ひたさを怺へて居る。

軈て奥田父子が入つて來た。父の破簾と水々した忰の頭が疊を隔てた闖越しに畏まつた。侯爵は二人の挨拶を鷹揚に受け流して洋盃を唇に着け「奥田さん、此の人は貴方の息子さんか」

「はい忰にございます、どうぞ御見知り置かれまして……」

「ふうむ」と侯爵は何事か首肯きながら富男に對ひ「君は米國で何をして來ました」

今こそ侯爵の面前で我が才智を示すべき時だと富男は功名に燃ゆる若い胸を跳らしてちよつと會釋をなし、

「日本移民の事に就て少しばかり調べて參りました」

「ふうむ、移民は什麼ぢやね」

如何なる卑しきものに對しても其の意見を徵し善言苦言ともに採用するのは侯爵のつであつた。

「非常に有望です」と富男は直に答へた。

「有望とは？」

「會社の成績に依つて見ますと、昨年より一萬人以上の增加です」
「日本から行くものが殖ゑたのぢやね」
「はい、開墾の土地は加州だけでも百哩以上になります」
「それで君の會社は？」
「五割の配當です」
「儲かつたぢやね」
「非常に」
「會社が儲かつたらうが、日本の國家は儲かつたか什麼か」
「はい」と富男は答辯に窮した。
「無智な無賴漢を狩り集めて貨物同樣に船に詰め込んで米國へ移住させた結果は、日本人の品位を害し、誤解を受け從つて國體を汚損する樣な事はなからうか」
「はあ多少其れは・・・」
「多少でも國體を損する樣な事があるのに會社が儲かりさへすれば可いと言ふのか」

「はい〳〵〳〵」と富男は侯爵の氣色に壓されて蒼白になつた。
「いや其の點に就きましては私からも常に注意して置きました處で」と父の喜平は恐る〳〵忤と侯爵の顏を見比べながら「勿論會社と申しましても國利民福が基礎でございますから」
「其れです」と富男は父の言葉に勢ひを得て「實は其の國利民福を以て私の會社は・・・」
「もう宜しい」と侯爵は靜かに制めて「どうぢや一杯献じやう」と洋盃を差出した。

六

散々侯爵に油を絞られた奧田父子は這々の體で引下ると侯爵は大きな聲ではッ〳〵〳〵と笑つた。
「晶子、あれは落第だよ、はッはッ〳〵」
恁う笑つた侯爵は最早や充分醉が廻つたので身體がこくり〳〵と例の事とて枕と毛布を取りに奧の室へ出た。其の後姿を見やつて
「何れもこれも落第ばかりぢや、今の若い者は皆んな役に立たん」

「時代が段々變つて來ますからな」
「併し晶子も何時まで恁うしても置かれまい」
侯爵は霎時打案じたが軈て急に眼を輝かした。
「あれは什麼だ、うむ爾だ、燈臺下暗しぢやて、あれが可い」
「誰ですか」
「あれだよ」と侯爵は獨りで飲得んで「あれだ、五郎だ」
「五郎？」
「うむ」
「侯爵五郎は私の悴で晶子の兄ですよ」
「だから丁度可いといふのだ。私は五郎といふ奴が好ぢや、あれの學校は？」
「文科大學で」
「文科？つまらない事をやつたもんだな。併し何でも可い、人物が確乎して居るからな」
「でも兄妹を・・・・」

「戸籍だけの事ぢや。晶子は私の娘ぢやから五郎と夫婦になつた處で差閊へがない」
「併し・・・・」
「大島さん」と侯爵は屹となつて探る樣に言つた。「五郎も貴方の實子ではあるまい」
「えつ？」
「爾ぢや、私に祕す必要がない。晶子を貴方に賴んだのも私の一生の祕密ぢやから、私は貴方から五郎の事に就て打明話がある事ぢやろと待て居たのぢや」
「いや五郎は私の實子です」と大島は決然と言つた。
「貴方の祕密を强て聞かうとは思はんが、若し本當に貴方の實子なら其れこそ結構至極ぢやが、私の娘を貴方の嫁に貰つて貰はう」
「併し其れは・・・・」
「出來ないと言ふのか、なぜ出來ない、私の娘に不足があるか、貴方が襁褓の中貴方の娘として十九年間育てた娘に不足のあらう筈がない、又貴方と私との間した處が、晶子を我が子の嫁にしやうと思はない筈がない、其れが出來ないとい

情があらう。五郎は馬鹿か阿呆か花柳病者か癲癇か但しは血統に缺點があるか遺傳に恐るべきものがあるか、私も言ひ出したからには得心のゆく樣に說明して貰はんと生涯の氣掛ぢや」

醉ふた侯爵は泰然と坐を構へて肩も搖がさずに大島の顏を見詰める。大島は凝と伏目に兩手を膝に突いて幾度も〳〵溜息を吐いた。何事か言はんとしては思ひ返し又言はんとしては思ひ返すもの、如く見えたが軈て靜かに言つた。

「何と仰せられても五郎は私の實子です」

「本當か」

「本當です」

侯爵は暫時大島隆二の顏を見詰めた。而して洋盃の底を膳に叩き付ける樣に置き「貴方は男ぢや」恁う言つて又「私も同じ事はもう言ふまい」と附加へた。

七

人の一生ほど奇怪なものはない他人から見て極めて平凡だが當人に取つては變幻數奇の苦

に惱むものがある。又他人から見ると奇拔過ぎる樣な經歷の人があるが、當人は一向平凡うて居るものがある。能く世間の人は恁ういふ。

「私の一生を書いたら立派な小說になりますよ」どんな人でも小說にならないものはなし多くの人は少しばかりの苦勞を自分だけの事の樣に大袈裟に見て喋々しく人に語りたがるのだ。

大島隆二は決して自己の閱歷を語らなかつた。世人は彼を波瀾曲折に漂蕩した主人公の思つて居るが彼自身は左ほどに思つて居なかつた。彼れは種々な苦勞をして來ただけに未來から將來にも益々苦勞があるだらうと思うて居る。非職の軍人が村の若者を集めて舊い戰語るなどは彼の眼から見ると意氣地なしに見えるのであつた。

彼は信州松本の生れである。彼の家は足輕よりも卑い分限で、父は士族の商法でしたが見事に失敗した。彼に一人の兄があつた。兄は相當の學校へも行き敎育を分でなかつたが、隆二が少年時代になつた頃は家計が日に〳〵迫つた。兄を學校へめには自分が學校を止めなければならない。彼は十七歲の時、藥や荒繩を賣り溜

を懷にして飄然として鄕里を去り東京へ上つた。

東京へ着いた時に彼の懷には一文もなかつた。そこで彼は麵麭屋の小僧に傭はれた。早く校へ入りたいといふのは彼の望みであつた。彼は暇ある毎に商業學校の門に立て學生の出入するのを眺めたり、掲示を讀んで見たり、規則書を貰つたり、耳を欹だて、教室の講義を立ち聞きしたりした。其れが校長の眼に留まつた。

「小僧お前は學問をしたいか」と校長は言つた。

「したいです」

「商業をやるのか」

「爾です」

「私の學校へ入りたいか」

「入りたいです」

「可し、では私の家の書生になれ」

「いやです」

「何故だ」

「人の世話になると後日頭が上がりません」

「うむ」と校長は考へて「では仕事をしろ學校の用事をして其の代りに講義を聽け」

隆二は直學校の學僕となつた。彼は天にも昇るが如く嬉しかつた彼は一生懸命に勉強した。が半年の後に彼は學校の課程は極めて無意味であると覺つた。商業史や金融論や簿記などは死學問や技巧で商業といふもの、根本義を誤つて居ると感じた。そこで彼の成績はいつも中等以下であつた。

彼の鋒鋩を認められたのは卒業以後であつた。彼は卒業後直に某銀行に入つた。營業振は氣に入らなかつた。

「銀行が預金の利子を後生大事にするといふのは間違つて居る。利子を目的とする賣だ。銀行なるものはもつと積極的なもので預金を活用して國家有益の事業に投ずべ此議論は書生の暴論として卻けられた。彼は銀行を去た。併し彼の手腕は一部の られた。其れに彼は自ら貧乏であるに拘はらず好人で人の難を救ふた。彼の左右に

種々な青年が圍繞いて居た。而して彼を親分の如くに尊敬した。

八

二十四歳で名古屋の支店長になり、其れから轉じて三井家の財産整理に當り直ちに英國倫敦詰を命ぜられ、歸朝したのは彼の三十二歳の年であつた。其れまで彼は妻がなかつた。當時垣指の手腕家たる彼の名を聞て結婚を申込むものは數へきれなかつた。彼は凡てを拒絶した。

或時彼は友人の招きに依て柳橋の柳光亭に行つた。墨田河の流れに潮盈ちて眞赤な月が回向院の甍を外れて上る頃は夜も漸く更けて隆二も大分醉ふた。二次會三次會を誘ふものがあつたが彼は家にある一人の老母を氣にして匆々に引上げた。柳光亭を出ると秋の氣冷やかに襟に落ちて廣い兩國の家並は眠つて居た。彼は橋を渡つて見たくなつた。其頃の兩國橋は石の欄干があつて、橋の袂だけに暗い瓦斯燈——瓦斯とはいふものゝ石油燈である——がある許りであつた。燈が暗いので月の光が愈々明かに河の流れが益々白かつた。彼は橋を渡つて河岸傳ひに歩いた。と此時彼は赤兒の泣聲を聞いた。片側は倉庫ばかりで片側は河である。赤兒の泣聲が聞え

べき筈がない。彼は又歩いた、と泣聲が益々聞ゆる。其れは足元から出るのであつた。其處に一艘の小船があつた、舟は苫もなく荒蓆を敷いた許りで舟縁はしとゞに夜露に濡れて居た。二枚の板を渡して蓆を掛けた上に蹲まつてる一人の男がある。

「泣くなよ、泣いてくれるな、ね、ね、ね坊や」

聲は岸打つ波の音を縫うて哀れに漏れて來る。隆二は其れを見やつたきりで其處を過ぎ約半丁も來た頃彼は此の路を行く事は大變に遠廻りだと氣が付いた。そこで彼は再び兩國らうと足を戻した。舟も人も既に居なかつた。と倉庫の盡きた處に八百屋がある。八百屋下に赤兒の聲が聞えた。彼は足を留めた、天水桶の傍で溝板の上に蓆を敷いて風呂敷を枕黄木綿の着物を着た赤兒が火が付く樣に泣きしきつて居る。隆二がたびしと音たてゝ開いた。

「捨兒だ〳〵」と顔を出したのは亭主と覺しき痘痕のある恐ろしく

に向の戸も開いた。

「捨兒かね」と隆二は言た。亭主はちらりと隆二の姿を見て向ひの

しやがるんだらうな。曾日の晩にも此處へ捨てられて飛んだ迷惑をしました。

「全く恁う捨兒が流行つちや敵はねえ」と弱々しい青い顔をした向ひの亭主はにちつと口の中を鳴らした。近隣の人達は大方起きて赤兒を圍繞いた。

「男だぜ、えつおい、なか〳〵好い子だ、おうよし〳〵」と八百屋は赤兒を抱き上げた。

「おう着替や何か、まあ玩具やおしやぶりまで包の中に入つてるわ」と八百屋の女房は胴から下と上と異つた寢卷をしどけなく着たまゝ風呂敷を解いて見ながらいふ。女連は皆其の方に集まつた。

「百兩ばかり入つて居ねえか、能く調べて見なよ」

「御巫山戯でないよ。百兩あつたら捨てやしないやね」

赤兒は人々の聲を聞き、八百屋に抱き上げられたので泣き止んだ。

「おや、捨てゝ間もないんだよ、手足が未だ暖けえや」と八百屋は言つた。

「どれ〳〵」と一人の婆アさんは赤兒を抱いて見て「爾だよ、捨てるまでにはどんなに肌身に

着けて温めてやつたがね、矢張り親の情だあね」

「だが、困つちまふな、又交番へ行かなけれや」

交番といふ聲を聞いて隆二はいかにも其れが可いと思ふた。而して默して處を去らうとすると八百屋は慌てゝ袖を惹き留めた。

「もし旦那、これはお前さんの子ぢやありませんか」

九

捨兒の親はお前さんでないかと言はれて隆二は吃驚して笑つた。

「馬鹿言へ、僕の知つた事か」

「だつて私が出て來た時お前さんが此處に立つて居ましたぜ」

人々は盜賊を捕へたとでもいふ樣な半好奇心と半滿足の皮肉な眼を以て隆二を圍だ輪の半分は家根から滑る月の光に照されて居た。

「僕は今此處を通つたもんだから……」

「ぢや何でも可いから交番まで一緒に來て貰ひませう」

「うむ、行かう」

隆二は仕方なく人々と共に橋を渡つた。橋の途中で饂飩屋に逢つた。饂飩屋は荷を擔いだま人々の群に入つて足を戻した。二三人の野次馬が又殖えた。

交番の巡査は卓子に凭れてこくり〳〵と居眠つて居た處であつた。彼は人々の騷ぎに驚いて夢中に跳び起きた。そして慌てゝ帽子の紐を頤に掛けた、當時の巡査の帽子は由物に廂を付けた樣な淺いものであつた。

「何ぢや」と巡査は言た。

「捨兒です」と八百屋は言た。

「又た捨兒か・・・時刻が早い」

「何時でございますか」

「九時ぢや」と巡査は柱の八角時計を見て眼を擦りながら「やあ是れは止まつちよるわい」

一同は笑つた。

「何を笑ふか」と巡査は硝子戸の外へ出た。

「時計だつて居眠りすらあ」と饂飩屋は小聲で言つた。巡査は聞えぬ風

と鳴らした。一同は靜まつた。

「赤ん坊ぢやね」

「はい捨兒は大抵赤ん坊で」

「理屈を言ふな・・・幾歳になるか」

「私の子でないから知りません」

「成程爾だ。男か女か」

「男でございますよ」と婆アさんは懷を開けて見せた。萎びた乳房を吸うて赤兒は眠つる。

「ところで什麼しようといふのか」と巡査は漸と眠氣を拂つて言つた。

「それは旦那に御願したいので」

「それも一理あるな、だが誰が捨てたんだらうな」

「赤ン坊に聞いて見たら解るだらう」と饂飩屋が言ふ。
「默つとれ、うどんやッ」
「はいッ」
「一體誰が見付けたのか」
「それは其の手前でございますが」と八百屋は言ふた。
「爾か其れぢやお前が責任者ぢやね」
「いや飛んでもない・・・私の前に見付けた人がありますんで」
「誰ぢや」
「此處に居る此の方です」と八百屋は隆二を指さした。
「はあ貴方ですか」と巡査は隆二の方を向いた。
「爾です」
「御話中ですが」と八百屋は遮ぎつて「此の子を抱いた時には手足が未だ暖かでございましたそれで捨てゝから間がないと思ひます」

「うむ、して見ると貴方が見付けたとすれば捨てた親と一緒位でなければならない譯」と巡査が隆二に言ふ。
「爾かも知れませんが、僕の見た時には誰も居ませんでした」
「ふうむ」
「尤も僕は其の前に一人の男が舟の中で赤ン坊を抱いて居たのを見ましたが」
「ふうむ舟の中で」
「爾です」
「男は一人ですか」
「一人です」
「女は？」
「居ません」
「ふうむ」と巡査は暫時考へて、
「貴方は此の子の親ぢやないかね」

一〇

八百屋に疑られ今ま又た巡査に疑られた隆二は忌々しさが、心頭に發したが、直ぐ其れが何となく滑稽の樣な氣もした。彼は自分の名刺を差出せば解決が容易であると思つたもの扱て恁ういふ渦中に三井物産會社支配人の肩書は出したくはなかつた。

「私も此の人だと思ひましたんで」と八百屋は進み出した。「曾日の奴も情死しやうてえ途中で捨兒をしたんですからな、捨てきれなくて又た見に戻つた處を可い鹽梅に捕へたんで、ねえ旦那」

「お前の店の前は捨兒に好い場所だと見へるな」

「とんでも無え事だ」と八百屋は首を縮めた。

「では僕が此の子の親だといふんですか」と隆二は言つた。

「いや爾ではあるまいかと、まあ是は疑問ぢや」と巡査は遁れる樣に言つた。

「どんな事情があるか知らないけれどもね、子を捨てるなんてまあ此の子の事も考へて御覽ろ。緣があつて娑婆に生れて來たものを猫や犬ではあるまいし、大きくなつても親のらずに居たら生きても生き甲斐がありやしません。子供は自分のものでない、皆んなかりものだ。刎體ない話さね」と婆さんがしみ〴〵言ふ。

「女の子なら拾つて育てゝも早く錢になるがなあ、男の子では仕樣が無えや」と饂飩屋亭主が言ふ。

「何しろ、養育院へやつたつて、彼處へ行く子供は碌なものにならねえんだからな」と

「何か書いたものがないか」と巡査は言つた。人々は赤兒の懷や風呂敷包を探の紙片もなかつた。

「今晩だけ八百屋、お前が預かつてくれ」と巡査は言つた。

「冗談ぢやねえ、家に三人も餓鬼が居るんで」

「では煙草屋お前は？」

「家内が病氣なんで……」

「お前の家内は此處に來てるぢやないか」

「はい、少し位は散歩が薬ですから」
「誰か無いかなあ」
「私はもう孫の牛乳代もやつとなんですから」
と婆さんは慌てゝ赤兒を巡査に渡した。
「誰か、今晩だけ」と巡査は隆二を横目に見て言つた。
「僕が引取ります」と隆二は言た。
「引取る？」一同の眼は隆二に向いた。
「どうも其れが爾ならなきやならねえ筈だ」と八百屋は言た。
「引取るとは？」
「僕が養育します」
「貴方の子か」
「誰の子でも構ひません。若し是れが僕の子とする方が貴方の御都合が宜いなら、僕の子として置きませう。要するに一人の子供が衆人のために厄介物に取扱はれ愚弄されて居る

と我々は人間として餘りに淺間しいと思ひます」
「可し、解つた。其れでは此の子は捨兒でないとするんだ、可いか捨兒捨てんとして心機一轉した子供だ。其れで可い、貴方の子は貴方の自由にするが可い」
「解りました」
隆二は赤兒を巡査の手から受取つた。
「貴方の住所姓名は？」と巡査が言ふ。
「心機一轉ですから不要でせう」
「其れも一理あるぢや」

一一

恁る事柄は今日の警察狀態に比較すると餘りに亂暴である。併し當時は怎る事は変くなかつた。
一旦の義憤から捨兒を拾ひ上げた隆二は其儘赤兒を抱へて車に乗つた。彼れは途中

や煉乳を買つた。其れまで彼は氣が付かなかつた。煉乳を買つた時、遠かの軒下に一人の男が立停つてるのに氣が付いた。其れから車が走れば後から從いて來る足音がする停まれば停まる。

「何者だらう」と疑ひつゝ行く中に九段の下から足音が聞えなくなつた。彼が赤兒を抱いて歸つて來た時母は未だ眠らなかつた。其時父は既に此の世を去り、兄も夭死して殘るものとては老母一人であつた。彼女は最早や六十であつたが其の勤儉な信州氣質は腰が曲がりかけてるに拘はらず畠を作り機を織る事を決して怠らない。夜は隆二の歸宅を待ちつゝ糸をくりのであつた。其れは安達が原の芝居にある樣な極めて舊式な糸車で、ぐう〳〵と唸る樣な音を立て乍ら跳るのであつた。隆二が洋行から歸つて來た時、夜中に此の糸車の音を聞て實に一種奇妙の感じがした。恁ういふ未開時代の遺物があるといふ事が第一に不思議で、彼は寢ながら其の音を聞くと昔暗い行燈の傍で母が此の音を立てゝ居た事を憶ひ出し恰ら子守唄の樣に懷かしい感じが起るのが第二であつた。

此夜も母は糸車を繰て居た。

「おうお歸りか」と母は出迎へた。而して隆二が赤兒を抱てるのを見た時吃驚して立

「はい只今」

隆二は恁う言て母の室へ通つた。母は女關の戸締をして其れから額に手を當て、零夜は十時になると奉公人一同を寢さしてしまふのは母の規則であつた。そこで彼女は室に戻つた。隆二は壜の中に煉乳を溶いて分量の表附を見ながら湯を注ぎ込んで居た

「お母さん、子供が出來ましたよ」と隆二は快活に言つた。

「どうしたのです」と母は嬌態して見せて坐つたが、如何にも其れは息子に力づけるための笑だと解つた。

「僕は情婦がありましてな、其奴は男を作へて逃げたもんだから」

隆二は折り〳〵母を驚かしては後で笑ひの種にするのであつた。母は又其れは空事で知りつつも故意と欺かれて我が子の得意な顏を見て樂むのであつた。併し今現在に赤兒は例の戯れとは思へない。

「爾か〳〵困つた事だな」と母は目をぱち〳〵して言つた。

「振られ男といふ形ですよ」

「お前は口惜しからうな」

隆二はぷつと噴飯した。

「嘘だ〳〵御母さん、これは拾つて來たのです」

「い、え〳〵私に祕さんでも可い、若い時には誰でも有がちの事だ。其れを按排するのは母親の役目だからね、今のお前の身分では妾の一人や二人を置いた處が誰も笑ふものがない、だけれども子供があつては嫁を貰ふになあ……」

怎う言て母は片手を胸に當た。いかにも困つたといふ色が老たる顏に充ちて居る。

「御免なさいお母さん」と隆二は非常に氣の毒になつて「本當に嘘です」

「本當かへ」と母は言つた。

「嘘です」

「いや嘘か本當かへ」

「はい本當です」

「では嘘なんですね」

「本當の嘘です」

「何だか解らなくなりました」と母は笑つた、笑つたのは解つた證據であつた。

「ではどうしたの」

「拾つたのです」

「嫁を貰はない中に子を拾ふなんて大變な事をしたもんですね」

母の顏は再び曇つた。隆二は有りし仔細を物語つた。

「男として默つて歸る事が出來なかつたのです」

母は凝と隆二の顏を見詰めたが軈て滿足さうに言つた。

「お前は正しい人だ」

一二

煉乳を吸ひ終つて赤兒は再び眠つた。母は赤兒の顏をつく〳〵見やつて吻と

「お前は正しい」と再び繰返した。

「併し正しいからと言つて再び恁ういふ事をなさるなよ。人の世話はする時には氣背かれた時に腹が立つ、腹が立つ位なら最初から世話をせぬが可いのだお前の御父さつた。松本の町では義俠者と立てられて、人に賴まれた事を厭とは言はなかつた。世た人は喉元が通れば熱さを忘れる、恩を仇で返すのでな、御父樣は年百年中人の事で苦勞して到頭貧乏で死んでしまひなされた。御祖父さんといふ人も爾でした。世話好は大島家の血統で、終りは皆な好くなかつた。お前の氣性も御父さん酷似だから薄情になれといふのではないが、世話好だけに愼まなければなりません。まこと世話をしようといふならどん底まで世話をするのが宜しい。此の兒にした處が緣あればこそお前が連れて來たのだらうから、これは私の手で必ず育てゝ見せます。東京に居るとお前が嫁を貰ふ妨げになるだらうから私が松本へ連れて行きませう。其代りに餘計な世話燒は今夜限り御止めなさいよ」

懇々と說く母の言葉に隆二は今更ながら感服した。いかにも只だ一旦の反抗心から前後の考へもなく捨兒を拾うたものゝ若し母がなかつたら此の子の養育も出來ず從つて折角に拾ひ上げた趣意にも背く事となり、我が將來の妨碍になる處であつたのだ。

「解りました、以後は注意しませう、僕はどうしても强者に反抗したくて自分を顧みなかつたりする癖があるのです。惡い事でないかも知らなすには恁ういふ小さな感情を忍ぶ必要があるのですからな」

其夜は赤兒を母に託して床に就いた。翌朝起きて見ると母は赤兒を抱て庭を散步して居た。昨夜とは異つて朝に見ると赤兒の顏は活活しくぱつちりとした眼、垂頰の肥り肉で玩具を舐ぶりながらきやつ〳〵と笑つて居る。

「幾月位でせう」と隆二は言た。

「八月位にはなるだらう、もう齒が生えかけて居る」

手を拍て囃せば笑ひ、食物を與ると兩手を重ねて頂戴をする。

「中々素性の善い人の子らしいよ」と母は言た。老人の事とて、一日お守をする中に何まで可愛くなり、人見知りもせずにこにこしてるのを見ると、もう我が孫の樣な

「これが本當の孫だつたらな」と母は幾度も言つた、丁度二日目の夜に母は恁う

「此の子の名を何と言はう」

「さあ、何でも可いでせう」

「其れでは御祖父さんは五郎と言ふ人であつたから御祖父さんの名を貰つたら什麼か」

「其れが可いでせう」

赤兒は五郎と號けた。家の女中は近隣の人達には親類の子だと言ひ聞かしたが過半は隆二隱し妻に生ましたのだらうと疑つた、母は五郎を伴れて鄕里松本へ歸つた。

其れから母は間もなく無暗に一日も早く嫁を迎へる樣に勸めた。手紙が矢の如く來る、隆二も老後の母に安心させる必要から漸く其の氣になつた。候補者は數限りもなくあつた、高等師範學校の出身もあれば華族女學校の才媛もある、實業家や官吏の令孃の寫眞が机上に堆くなつた。併し彼は凡てを拒絶した。

「馬鹿でない限りは餘り才智のある女でない方が可い」

此の註文に合格する者は殆んど無かつた。

一三

才智のない女といへば即ち鈍間な女である。世間廣しと雖も我が娘は鈍間でござると保證する親はない。鈍間でも賢いと言ひたいのは親の心である。隆二の註文は此點に於て失望せざるを得なかつた。或る時、母は鄕里から一人の女を伴れて來た。眉目美はしいといふ程ではないが決して醜くはない。髪は豐かで少し肥り肉の、皮膚は雪の如く白いが手足も顏も日に煙けてゐる。女の父は歷々の士族であつたが田舍に引籠り腰の刀を鍬に代へた、彼の女は幼少から畠を耕し、機を織る、朝から晩まで炊事書算術裁縫を學んだ。父が死んでから彼女は小間使に入つた。而して五郎を我子の如く沈默で正直で東京人の如く氣は利かぬが母

ては極めて信實であつた。

「此の女ならお前の嫁として不足はなからう」と、母は言つた。

「お母さんが見極めたなら僕は決して異議はありません」と隆二は言つた。而して花々婚式を行つた。女は今の夫人松子である。

其の夜の事である、松子は恭しく新夫の前に手を支へて言た。

「私一生の御願がございます」

「何だ」と隆二は言つた。

「御緣があつて生涯御側で暮す樣になりました以上は什麼か五郎さんを貴方と私の二人の子にして下さいまし」

「五郎を？」

「はい、あれは貴方が餘所の女に生ませなすつた御子ですか。但しは御拾ひになつたお子ですか、それは何方でも構ひません。御緣があつて貴方の子になりましたのなら詰り私の子も同樣でございますから」

「併し其れは違うだらう。お前と僕の間に出來た子に我れ〳〵の家督を相續させなきやならんのだ。五郎は拾つた子だからな」

「御道理ではございますが、相續の事は後々如何樣にもなります。兎も角あの子も人の子でございます。學校へ行く樣になりましても親が無くては肩身が狹からうと思ひます。男の子は猶ほ更ら世間へ出て働く時に籍のない日蔭者だと言はれたらどんなに口惜しうございませう。拾つて育てるだけなら誰でも致します。拾つた以上は當人の將來が立ちゆく樣にするのが當然ではございますまいか」

「豪い、氣に入た。つまり徹底的に世話をしろと言ふのだね。可し、二人の子にしよう」

結婚式の當夜二人の間に十月を過ぎた子が出來た。二人が此の事を母に語つた時、母は大く躊躇したが、

「嫁の言ふ事は正しい事ですから私も異存はありませんが、相續だけはね血緣の者をね」

これだけ言つて何も言はなかつた。一家は春の如く麗かであつた。五郎は二人の子と共に出でられ二人の手から手に珠の如く愛せられた。と或時一通の手紙が來た。封筒には、

名氏と書いてあつた。隆二は封を切て讀み初めた。半紙一枚に只だほんの五六行認めてあるだけであつた。

「心急ぎ候まゝ、亂筆御免被下度候、私は今ま何事も申上ぐべき辭無之候、何れ御高恩の萬分の一も御報じ申上ぐる時あるべく只だ貴下樣を神と思ひ佛と思ひ候だけを認め置くだけにて候、私は二箇月以前に兩國の河岸に子を捨てたる無慈悲の親にて候、貴下樣があの子を我子の如く愛撫し下さる事を毎日御邸の前に彷徨きて拜見致し感謝の涙に暮れ居り候なれども只だ一言一大事を申上たく此の文を認め申候、いかに御鍾愛下され候ともあの子は決して貴家相續人となし下されまじく、彼は貴家の子たる資格なきものにて候、私の樣な卑しきもの、子が貴家の子となる事は榮譽至極にて候へども、海より深き御恩を思ふと共に彼れの一生の祕密を申上げねばならぬ事と相成申候、彼は……」

此處まで讀んだ時隆二は思はず「あつ」と叫んだ。

隆二の叫んだのは何のためであるか、彼は暫時呆然と眼を壁に移したまゝ、呼吸も吐けなかつた。

「もう晩い」と彼は呟いた。而して更に又手紙を讀み返した。

「母に言はうか、松子に言はうか」

手を額に當てゝ、凝と考へ「いやどんなに失望するだらう」

彼は直ぐ燐寸を摺て手紙の端に付けた、薄い炎がめら〳〵と紙を這ひ上ると白い灰が畳の上に散る。

「仕方がない、祕密だ」と彼は獨りで言た。祕密とは何か、隆二が最愛の母や妻まいと決心したものを著者が今ま輕率に讀者に洩らす事が出來ぬ。

五郎は益々可愛くなつた。片言を言ふと家中が笑ふ、よた〳〵歩き出すと家中もう夢中になつて一日一ぱい御守をするのであつたが、折り〳〵例の思慮深い眼は未だ出來た樣子がないかへ」と松子に訊くのであつた。

「いゝえ御母さん」

「爾かへ、私ももう永い事はないから、せめて本當の孫の顏を見て死にたいと思ふのでだ」

母の希望に拘はらず是ばかりは什麼する事も出來なかつた。一年は經た、併し松子は妊娠しなかつた。母はいつも其の事を言ひ續けて居たが或日朝から頻りと欠伸をして午後に風呂につたまゝ、こつそりと死んでしまつた。急性の腦充血だと醫者は言つた。

母の死後は家の中は實に淋しくなつた、せめてもの慰めは只だ五郎があるだけであつた、二年は過ぎた三年は過ぎた、五郎は五歲の時媒母と共に幼稚園に通ひ出した。家を出る時に軍歌を唄ひ、歸る時に遠くから又唄つて來る。隆二は段々可愛くなるにつれて例の祕密の事も次第に薄らいで來た。而して二人の中に生れるなら寧そ女の子であつて欲しいと思ふ樣になつた。

一方隆二の實業界に於ける勢力は次第に加はつて來た。彼の一言一行は新聞紙の注目する處となつた。凡そ彼の關係して居る事業は悉く順調に行つた。或時彼の家を訪問した一將校があつた。

「やあ楠さんようこそ」と隆二は應接室で聲を掛けた。

「暇乞に來ましたぢや」

「いつ御立ですか」

「まだ判然しませんが、多分今夜」

「今夜？其れは急ですな」と隆二は楠中將の顏を見詰めた。中將と隆二とは昨日今日の間柄ではない。彼が三井物產の倫敦支店長たりし時に楠は未だ佛蘭西公使館附の一少佐に過ぎなかつた。貧乏少佐の彼は凡の外交官の如く洗濯屋の支拂にも困る事が屢々であつた。佛蘭西の巴里は花の巷、世界の都である、夜會、舞踏、賭博、珈琲、中にも若き士官と云へば白粉の香に渦卷く接吻の雨が降り注ぐ、少佐の財布の一箇月分は一宵の中に泡の如く消え行く、其の都度彼を救ふたのは隆二であつた。少佐の無心の仕方は特種なものであつた。彼は決して込んだ樣な顏をしない。

「金が要るのぢやがどうかしてくれんか」

是に對する隆二の應對も特種であつた。彼は幾許要るかを聞かずに自分の財布を卓子に出して、

「御使ひなさい」

「貰つてゆくぞ」

中味だけを抜いて計算もせずに自分の衣匣にざら〳〵と零して其の儘歸る。恁ういふ間柄として隆二は楠中將の顔を見ると何の用向であるかゞ直感されるのである、が此時だけは解らなかつた。

中將はいかにも悄然として居た。

一五

丁度其時は日清戰爭の發端であつた。金玉均が殺され東學黨が起り王妃は弑せられ朝鮮の危機が刻一刻に迫つた。而して此の憫れな弱國を救ふべく日本の軍隊が京城に入り込んだ。清國の軍艦は見る見る擊沈せられた。日本は全師團に動員令を下した。佛蘭西から歸つて中將となつて名古屋の師團長をして居た楠小太郎は直に出征を命ぜられた。流石に今度こそは生て還ることを期せぬ。多年の友情此に告別に際して一滴の涙も然るべき事だと隆二は思つた。併し隆二は中將の氣象を知つて居る。今戰場に臨んで戀々たるべき人でない。

「どうかなすつたのですか、御顔色が惡い」

「いや何でもないが」と中將は霎時もぢ〳〵して居たが軈て突然に恁う言た。

「大島さん、私は御願がありますぢや」

「何んですか」と隆二は微笑して言た。

「詰らん事ぢやが貴方でなけりや賴まれん事ぢや、笑つてくれるな私に女がある」

「其れは承知して居ます」

「女は私に惚れちよる」

「なる程」と隆二は此の率直な言葉に寧ろ感心して笑ひもしなかつた。

「中々心掛の好い女でな一日でも私が顔を見せんと頭痛がすると言ひ居る」

「なる程」

「妾とは言ふものゝ毎日手習をして字を習ひ居る。三味線を止めて臺所や洗濯もやり」

「なる程」

「そこで私は考へた、女は未だ若い、若い身體を以て私の妾となつて日影者で暮らすといふは

惜しいものぢや、私も女を愛する以上は徒らに枕の塵を拂はせる樣な卑しい境遇から彼女を救ひ出して正當に人の妻となり人間並の晩年を送らせる樣にしてやらなければならんと思ふ、これが女の眞實に對して報うる道ぢやろう、どうか」

「無論其れは正しい事です」

「そこで私は女に離別を宣告した女は厭ぢやと言ふ。私は强て納得せしめた。私も今度出征すると生きては還らん積ぢや、氣掛りになる事は凡て形付けて行きたい」

「御尤です」

「だが此に難問題がある、女は私の子を孕んで居る」

「なる程」と言たが隆二は首を傾げた。

「女は是から然るべき良人を有たなければならん身ぢや、子供があつては女の自由を束縛なものぢやから、子供は私の方へ引取らなきやならん、ぢやが私の正妻には子が五人、而して妻は年中病氣で寢て居る。妻腹の子を引取る事は一家の平和の上に於て誠に不可ならず私の死後妾腹の子の始末に困る樣な事があつては私の耻辱、又生れた子供の前途ぢや、同じく私の子でありながら腹が異ふために五人は陸軍中將の遺れ形見と世間に一人は日影者となつて一生を朽ちさせるは如何にも私は殘念ぢや」

「恁う言ひ終つた中將の顏は未だ生れぬ子に對する眞實の愛情に燃えて居た。

「承知しました。私が御貰ひ申しませう」と隆二は決然と云た。

「貰つてくれるか」

「私の樣な者に下さるなら結構です」

「ぢやが細君が何といふだらう」

「家内も喜びます」

「有う、私はこれで心置きなく戰地で死ぬ事が出來る。貴方には借金があるが、借金は返す。貴方に返すのも日本國に返すのも同じぢやからな」

「ん、私にも一つの御願ひがありますが聽て戴きたい」

「」と中將は言た。

隆二の快諾に重荷を下した中將は初めて麥酒の洋盃を唇に當てた。

「御願といふのは他でもありません」と隆二は熱心になり、「御願は二箇條です。第一は御貴方申します御子さんは絶對に私の子にさして戴きたいのです。縱令如何なる事があらうとも貴方の子だといふ事を御漏らしにならないといふ誓約を願ひたいです」

「勿論ぢや」

「第二には今日限り今までの樣な過度の親密な御交際はお互に愼まねばならないと思ひます。私は商人です。これから大事業をなしますに就て政府と什麼な取引をしないとも限りません、其の都度に私と貴方の間に親戚關係の交際がありましては世間嫉妬の的となり物議の種となり延いて不測の禍を受くる事があります。此の點は御注意を願ひます」

「可し〳〵道理ぢや、其れでは賴む」

「御安心下さい、私が引受けました」

中將は喜び勇んで大島家を出た、一と月二た月は過ぎた。我軍連戰連勝、無人の境を行くが如く四百餘州の草木を風靡した。楠中將からは一枚の葉書も來なかつた。併し新聞紙は絶えず中將の雄姿を傳へた。丁度四月目の春であつた、中將の愛妾新橋の小今は安安と產の紐を解いた。生れたのは女兒であつた。

今日か明日かと待ちあぐんで居た松子は乳母も伴れずに獨りで小今の產褥を訪ふた。而して其の日の中に三番町の自邸へ伴れ戻つた夕方に隆二は會社から歸つた。松子の居室へ行つて見ると友禪羽二重の小蒲團や小搔卷の色彩が先づ眼に着いた。半屏風を立て廻らして其處に綿を被つた赤兒が快よく眠つて居る。其の傍らに松子は嬉しさうな顏をして「貴方！御孃樣ですよ」

「自分の子を御孃樣と言ふ奴があるか」と隆二は言つた。松子はいかにも爾だといふ風に首肯いた。

「貴方は女の子が欲しいと仰有つたもんですから、丁度御誂へ向ですわ」

「うむ」と言つて隆二は「五郎は」

「今まで此處に居て、赤ちやんを不思議さうに見て居ましたが御庭の方へ行きました」

「爾か、何とか言たか」

「お前の妹だよと言ひましたら喜んで居ました」

「ふうむ」と隆二は首肯いたが、此時承塵に掛けてある母の肖像が眼に付いた。彼は思はずぎよつとした。

「お前は親分肌で義俠心があるから人に頼まれた事は厭とは言へぬだらうが、人の世話をするといふ事は餘程考へなければならない事だ」

恁う言た母の言葉が今まありく〳〵と耳に殘つて居る。路傍に捨てられてあつた子を拾上げて我が子となしたるさへ輕率であつたと母が言たのに今又た他人の子を引受けるとは何といふ不思議な事だらう、平素から氣を付けて餘計な世話燒は止めやうと努めて居たに拘はらず、何時の間にか恁ういふ事になつてしまつた。

「どうも不思議だ」

彼は腕を拱んで其れを考へた。赤兒はうにやく〳〵と顔中の皺を動かしたが軈て大きな欠伸をして直ぐに又た續けて嘘をした。

「自分の家だと思つて安心して眠つてゐるんですわね、可愛わ」と松子は笑つた。

「五郎と何方が可愛か」

「五郎も可愛けれども、此の子も可愛うございますわ」

「何方も可愛がつてやつてくれ、身分なんて詰らない事だ」と隆二は唸る樣に言た。

一七

大自然は人間を支配す、其れは單に人間の運命ばかりでなく、各自の靈の底まで自由に喰ひ入る、併し時としては全然其れに反對な現象を呈はす事がある。或點までは人間が自然を支配し得る。

緣も由緒もない赤の他人が不思議な動機からして兄と言ひ妹と言ふ事になつた。而も當人は毫頭他人であるとは知らない。五郎と晶子は他所の見る眼も羨ましい程睦しかつた。腕白盛りの五郎も、晶子のだと言へばどんな玩具でも手を觸れたり破つたりする事はなかつた。晶子は又學校から歸つても兄さんの姿が見えぬと泣顔をするのであつた。折りく〳〵近所の人に六つ

になる晶子と十になる五郎が馬車に乗つてるのを見る事がある。又五郎が晶子を背負して阪を上つたり川を渉つたりするのを見た事がある。

五郎が中學校で晶子が小學校を卒業した時に父の隆二は大阪に大銀行を起す事になり、居宅も大阪と定めた。隆二だけは東京に殘つて晶子も松子も大阪へ移らねばならぬ、此時ばかり晶子は心の底から悲しかつた。其れは十四の時である。流石に耻かしさを知つてるので泣くにも泣かれず、詮方なしに大阪へ行たもの、大阪の土地は晶子に適さなかつた。煤煙に濁つて居る天色、樹木の少い狹い町、男でも女の樣な言葉を遣ふ國、東京とも大阪とも付かぬ奇妙にごつごつした言葉の學校教師や生徒音樂もなく繪畫なき、殺伐な埃の巷、凡そ見るもの悉く厭らしく思ふた。都會に育つた者は得て他國を嫌ふ癖があり勝のもので晶子にも其れがあつた。爾いふ不快な日を送るに付けて彼女は堪まらなく、五郎が戀しくなつた。彼女は毎日の樣に五郎に手紙を書いた。五郎からも慰めの手紙が來た。手紙だけでは何の役にも立たない、彼女は毎日うつら〳〵と病人の樣に暮した。

「どうしたの？」と母は訊ねた。

「東京へ歸りたいわ」と彼女は涙ぐむで答へた。

「そんなに歸りたければ歸るが可い」と父は笑つた。彼女は喜び勇んで東京の邸に歸つた。

の後松子は隆二に恁う言つた。

「あんなに仲睦しいんですから行く〳〵は夫婦にしたら如何でせう」

「馬鹿言へ、兄妹ぢやないか」と隆二は言つた。而して「もう二度と其那事を言ふなよ」

加へた。

「當人達が兄妹だと思つて居るんだ」

二人は美しく健全に育つた。其の頃からして二人の性格が段々明瞭して來た。晶子は美の沼仰者であつた。彼女は凡て惡いもの暗いもの醜いもの粗雜なものを嫌つた美しきものには總ゆけて讃歎した。彼女は快活で御轉婆で、能く笑ひ能く歌ふ代りに悲しい事があ

吞した。彼女は毫でも自分の感情を僞る事が出來ないと共に凡ての人を愛し又凡て

た、「お前は人生の美を呼吸するために生れたのだ」と五郎は言た。實際彼女は

一種の力を有て居た。例令ば彼女は長唄や三味線や茶の湯や琴などは淑女間に流

じて居るに拘はらず彼女は其れを排斥した。

「唄の意味が解らず三味線の調子は卑しく琴は幼稚で茶の湯は不必要の虚禮ですわ」と彼女は言たのみならず文句の意味も解らずに長唄を歌つたり虚禮を稽古したりする人々に對しては一種の憎惡すら感じた。彼の感情は其れだけ鋭敏で強かつた。彼女の眼には美しい世界と醜い世界と極めて判然と區別が付いて居た。而して彼女は醜い方面には決して顔を向けなかつた。彼女が十一二の時或る新聞の講談の挿畫に武士が刀を振ふと人の首が宙に飛んでゐる處があつた彼女は一目見て新聞を破つた。翌日から特に乞うて其の新聞の購讀を止めた。

一八

五郎の感情は晶子よりも烈しかつた。晶子は清らかな水も絶えず美しい光を放つて流るゝ如く活動的ではあるが澄み渡つた靜かな力であつた。五郎は恰ら火の如くである。彼は何時も燃えてゐた。人が見て馬鹿氣た事でも彼が其れに興味を有つと殆んど全力を熱中せしむあものであつた。彼は能く人と喧嘩をしたが、彼は又多くの友人を有つて居る。而も最も親しい友は一

や二度彼と喧嘩をした事のある人間であつた。

兄さんは危ない人だわ」と晶子はいつも言た。

君は自動車の樣な人間だ。走つてる時も停まつてる時も發動機が燃えて居る」と親友

言つた。彼の友の中で高井だけは彼も畏敬して居た。高井は沈默で家で

何でも人に對して怒つた事がない。彼の生國に就ては彼は語るを好

、五

彼が朝鮮に生れた事を知つて居る。彼に菊子といふ一人の妹があ

宿屋に妹

一人で暮して居る。此の夏休み中に高井兄弟が五郎を箕面に訪ねて

さうといふ

ぬであつたが、妹が病氣のために房州の海岸へ行つたのであつた。

晶子が楠侯爵のお酌を濟まして兄の室へ行くと五郎と母が語る聲

晶子は不圖恁

へた。

「かして嚇かしてやりませう」

女は庭へ降りて蛙を拾ひ其れを紙袋に入れて竊と兄の背後へ出してやらうといふ

。そこで彼女は蛙を探しにかゝつた。窓の前に楓が濃かい影を作つて兄の白絣が微

るだけであつた。不圖氣が付くと晶さん〳〵といふ聲がする。彼女は耳を傾けた。

「お前までが其那事を言つちや本當に困ります何も彼も言てくれなけりや」と母の聲、

「だつて仕樣がありませんよ。晶さんの氣持は僕に解りませんからな」

「でも大抵は解つてるでせう、お前なら何でも打明けるから」

「併し、それは什麼でも可いぢやありませんか」

「いゝえ可くはありません。どの申込も〳〵斷つてしまつては何か疵でもある樣に世間で思ひますから」

「世間で思つたつて構ひません。實際晶さんの良人たるべき資格のある人は絶無なんですからね」

「其那事を言つた日にや晶子は猶ほ增長して氣位ばかり高くなつて仕樣がありません」

「併し御母さん、僕は實際晶さんを詰らない人の處へやるのは惜しいと思ひますよ」

「其りやね、それに違ひないけれども」と母は笑つて「お前は什麼すれば可いとお思ひだえ」

「僕はちやんと決めて居ますがね、未だ早いから言ひません」

「考へがあるなら言つて下さい」

「併しお母さんは不贊成です屹度」

「言はなければ解らないぢやないか」

晶子は蛙を抓るのを忘れて蹲んだまゝ聞き濟ました。中形の浴衣の長い袂が青い苔の摺るので彼女はたくし上げて膝の上に丸めた。

「僕は晶さんに最も相應しい人間を知つて居るんですが」

「誰ですか」

「まあお聞きなさい、お母さんは僕を好きですか」

「何を言ふんです」と母はくすくす笑ひ出して「又私を揶揄ふのかえ」

「いゝえ眞面目です、僕を好きですか」

「あゝ好きですよ、短氣だけが玉に疵だけれども」

「玉に疵」と五郎は釣り込まれて、

「いけないお母さんが冗談を言ふもんだから……兎に角僕は豪いと思ひますか」

「あゝ豪いよ」

「ぢや、僕より豪い人間があるなら餘程豪い人ですね」

「爾です、けれども……」

「まあ御聞きなさい、僕の友人に一人あります、僕より遙かに豪い」

「何處の人ですか」

「高井です、お母さんも御存知でせう」

「高井さん？」と母は問ひ返した。晶子は刷と顔を染た。

一九

男と女が一緒になる、是を夫婦と言ふ。神經質に考へると見ず知らずの他人がちよいとした動機から百年の苦樂を共にする樣になるのだ、是れほど危險な事はない。此の危險を防ぐために日本では親や兄や姉其他先輩が嫁や婿の選定をする。其れは未だ年若き花嫁花婿には人を見るの明が充分でないからである。是が日本の習慣である。中にも娘の時代は凡てを親や先輩に

一任して居るので親達の決めたものには抗議を言へない事になつて居る。實際親の身になつて見ると我が娘が可愛ければこそ種々氣を揉むのである。そこで親を信ずる娘は婿たるべき人を什麼な性質かをも知らずに親が選んでくれたのだから間違はなからうと思ひ込んで居る。親に對する信念は如何にも斯くあるべき事であるが、一歩退いて考へると其處にも危險がある。いかに聰明な親でも充分な交際もない青年の性質を熟知して居る筈がない、のみならず親と婚との氣が合つても嫁自身と合ふや否やは問題である。親が惚込んで貰つたために當人終生涙の中に暮さねばならぬ例はいくらもある。況んや媒人の掛引と言つて、世間には他人の戯的に媒介して夫婦となすものが實に多い。私は十組の夫婦を世話しました。私といかにも功名顔に語つて居る世話好の老人なるものが讀者諸君の隣近所にもあ斯る人こそは實に輕率極まるもので男と女の肉體の聯絡を以て結婚の第一義となす馬を取扱ふも同じである。結婚は肉の一致と共に靈魂の一致でなければならぬ。互に愛するものでなければならぬ。

此に於て歐米の樣に自由戀愛の必要が生ずる。自由戀愛は靈魂を第一にして肉體

る。先づ互ひに交際して其の性格を識り合ひこれから生涯を共になし得る尊敬すべき人で
と信ずる上に於て初めて結婚を申込む。日本のは先づ肉體を共にして靈魂の如何を問はぬ。
れは古昔から女を卑しんだ惡習と結婚の目的は子孫を殖やすにありといふ蕃殖主義からして
なきは去るといふ不法な格言まで殘つたのである。
併し自由戀愛にも亦た弊害がある。其れは青春の氣に任せて自重心を缺き輕率淫蕩に陷る
である。兩者の一利一害は伯仲の間にあるが、日本では維新以來此に五十年、而も此の問題は
未だに解決されずにある。人間として最も大切な問題が解決されずに其の儘結婚が續けられつ
つある。而して若い人達は自分の將來を考へる暇もなく妻となり良人となる。特に最も憫れむ
べきは男子より婦人である。男は事業に對する希望がある如く、婦人は幼少から「お嫁さん」
になる事を未來の唯一の樂みとして居るのだ。
晶子は矢張り其れであつた。どんな良人を持つだらうかとは物心の付き初めた頃からの疑問
であつた。併し彼女には恁ういふ良人が欲しいとか、恁ういふ男が可いとかいふ慾望はなかつ
た。十六七歳の頃からそろ〳〵結婚の申込が始まる。母からも相談がある。最初は餘りに突飛

で滑稽に感じた。二度目になると何となく嬉しくなつた。其れは女として通有な感情に
單なものであつた。
「私ももう御嫁になる資格があるのかしら」
今まで半ば子供の樣に自分で思つて居たのが、お嫁の話を聞くと最早や大人の待遇
へたといふ氣になる。其の頃からして彼女は什麼な男が私の理想かしらんと自分に問
凡ての男は立派であるとも思はれる。又凡ての男は氣に喰はぬ樣にも思へる。今まで
と交際した事のない彼女は男に就ての研究が極めて不充分であつた。彼女の接近し
ば兄及び兄の友人だけである。晶子は兄も其の友人も大好であつた。その好なもの
は高井實を推薦した。
「高井さんは善い人だ」と彼女は肚の中で言つた。併し……」
善い人だとは思ふが、良人とすべきや否やに就ては未だ一度も考へなか

二〇

楓と叢竹の間に身を潜まして兄と母の話を聞くともなしに聞いた。晶子はほつと顔を染たまま立去る事は出來なかつた。

「一體御父さんの御意嚮は什麼なんですか」と五郎が言ふ。

「御父さんは誰でも可いから當人の氣に入た人で將來見込のある人なら可いと仰有いますよ」と母が言ふ。

「流石に親父は豪いですね」と五郎は笑つて、

「本當に僕は家の親父ほど豪い人はないと思ひます」

「親父なんて、まあ何といふ口が汚ないんです」と母も笑つて言た。

「處で親父はですな、いや御父さんは其れで可いとして高井君を知つてゐでせうか」

「さあ其れは什麼ですか。楠さんと先刻も其事に就て御相談があつた樣ですが」

「ぢや僕はこれから侯爵と御父さんに話をしませう」

「ちよいと御待ちなさい、其れは晶子さんにもお前から能く胸の中を聞いて見てから什麼？」

「なるほど、併し晶さんに異議がなければ高井君と結婚さしてくれますか」

「だから其れは御父さんと侯爵にね」

母の去た後で五郎は暫時庭の緣の動くのを見やりながら滿足氣に微笑した。我が最も愛する妹を最も愛する親友の妻となし得る事が出來るかと思ふと嬉しさに胸は跳つて身體中の血が音樂の如く快よく流れる樣に思はれる。青春の時代に最も樂しきものは親友と喜を共にする事である。其れは極めて純な極めて美くしい光燿の時代である。

彼は午後の日光に顫へる萬木の緣に向つて大きな口を開いて「アー」と怒鳴つた。

不意打を食つた晶子は突然冥想を破られて吃驚して立上つた。

「いやよう兄さん」

窓の下から晶子が飛出したので五郎も同じく吃驚した。

「なんだい、吃驚したよ」

「私の方が餘程吃驚したわ」
「ぢや御互ひだ」と五郎はつくづくと晶子の顔を見て、
「なるほど美人だ」
「可いわ、酷いわ」と晶子は長い袂を振る樣に肩を搖つた。
「まあ御入りよ」
「入らないわ、そんな事を言ふから」
「兎に角御入りよ。話があるから」
「いやですわ」
「ぢや美人と言つたのを取消して晶さんは醜の醜女なり」
「醜女だつて可いわ」
「又た怒るのか」
「えい、私怒るわよ」
「斷はつて怒るといふのは念が入てるね」

「念が入ても可いわ」
「それぢや什麼すれば可いんだ」
「什麼しなくたつて可いわ、兄さんの御世話にならないから」
「其れぢやお前の結婚の相談も御免蒙らう」
「御免蒙つたつて可いわよ。私高井さんの許へなんか行かないから」
「聞いて居たのか」
「えい」
「立聞をしたのだね」
「聞える樣に話して被居るのが悪いわ」
「はゝゝゝ、其れは都合が可い。處でお前は什麼思ふか」
「何を？」
「高井君を」
「私厭ですわ」と晶子は楓の葉をむしりながら言た。

二

晶子はしみ〴〵と考へた。今まで結婚の話が幾度もあつたけれども夫は概ね父や母が決めくれる事だとばかり思つて居たので、自分に相談があつてもあの人の顔が變挺だから厭だとか態度が氣に入らないとか主に外形だけの批判で言つたに過ぎなかつたが、今日は兄の口から親切な相談を受けたので今までの樣に無責任では濟まぬ樣な氣がしたのであつた。

「高井は什麼して厭か」と兄は熱心に問ひ掛ける。

「什麼つて事もないけれどもね。私其那事を考へた事はないわ」

「なぜ考へない」

「なぜつて兄さん、考へないものを仕樣がないわ」

「考へてくれなくちや困るね」

「兄さんは御自分のお嫁さんを考へて？」

「僕はそんな事を考へるもんか」

「それ御覽なさい」

「男は考へなくても可いのだ」

「女だつて必要があれば考へるわ」

「必要があるんだよ」

「でも私……」

「高井は厭か」

「厭でないけれども、私ね、あの方を未だ研究して見た事はないわ」

「研究して見るさ」と五郎は笑つて「僕は高井物は無いと思ふよ」

「兄さんが可いと仰有るなら私も可いと思ふわだか」

「何だかとは何んだ」

「解らないわ」

解らないといふ言葉の中には少女心の羞恥さもあれば男には言はれぬ事もある。五郎は不思議な顔をしたが追窮はしなかつた。話は其れで終りとなつた。

併し其夜は更くるまで晶子は眠らなかつた。彼女は一生懸命に此の大問題を考へやうと努めた。是れが彼女に取て生れて初めての研究であつた。最初は何から考へて可いか解らない。

「先づ高井さんは什麼な性質だらう」

恁う考へた。窓を開けてあるので冷々とした風が室に滿ちて來る。折り折り河鹿の鳴く聲が聞へる。彼女は高井を頗る善人で溫健で親切な人間だと判定した。けれども彼女は其れだけで結婚するといふのは何となく物足りなかつた。結婚するにはもつと大きな理由がなければなるまいといふ氣がした。大きな理由とは何だらう。

「私があの方を愛する氣になれるだらうか」

不圖恁う考へて彼女は刷と顏を染た。頃日何かに就けて顏が赧くなる。赧らめまいとすればする程益々赧くなる。

小說や雜誌や外國人の生活を見ると愛が凡ての基礎になつて居る併し晶子は未だ何た事がない。父と母と兄に對する愛の他には戀と名づくべき愛を起した事はないので通に言ふと晶子は十九歳、これまで兄の親友として親しく交際して來た。學校へ持てを書いて貰つたり、宿題を敎へて貰つたりした。兄は面到臭がつて直き腹を立てるが二時間でも三時間でも怠屈もせずに敎へてくれた。其れだけ親しい間柄でありながら、を良人にしやうとは今まで夢にも思はなかつた。左りとて別に嫌ひな點があるでなし、何見ても好きな人に違ひないのだ。

[illegible]に考へたが解らない。晶子は到頭焦れつたくなつて蚊帳の中に入つた。寢ながらる積であつたのだが、枕に頭を着けるともう眼の皮が重くなつて其儘快く寢

二二

侯爵は翌日東京へ歸つた。隆二は暑さに拘ら、

何事か重大事件が勃發したのだらうと家族の人達は思つた。

と居眠りが出來た。横になつて寢んだら好さ相なものだのに、松　して横

暑い中に冬物の洗濯をしたり蒲團の綿を入れたりしなければならぬと言ひ〳〵し

を持つたまゝこくり〳〵と舟を漕ぐのであつた。折り〳〵五郎は母の脊中に棒を突つ

右と左に傾く傾斜の度を測量したりするが、其時は眼を開けて笑ひながら直又眠る。

五郎と晶子は單調な生活に倦きた。最早結婚の噂もなくなつた。其處へ高井からの手紙が來た。

「妹の病氣も全快したし急に君に會ひたくなつたから明日妹を連れて行く」

五郎も晶子も松子も珍客を待つが如くに喜んだ。愈々到着の日に五郎は恁う言つた。

「晶子さん、大阪まで出迎ひに行かう」

「えい、行くわ」

二人は朝早く起きて出掛けた。五郎は高井を御馳走するために風月堂でカステーラを買つたり灘萬でいろ〳〵な食料品や、壜に入た五色の菓子やキユラソトやペパミンを買ひ、其れから高井が好きだからと言て牛肉を澤山に買て新聞に包んだ。其れ等の包は可成大きかつた。其れを大きな竹籠に入れて肩に擔いだ。籠の目から玉葱や林檎が見える。晶子は其れを、

て笑つた。

「構はんよ〳〵」と五郎は言た。晶子は流石に人の見る眼も耻かしく思つ

に對する情の美しさに感心して絶えず滿足さうに兄の顔を見戍つた。

疲れた顔を滿載した汽車が梅田に着いた。ぞろ〳〵と吐き出さ

く見廻した。高井らしい人の姿が見えない。

「どうしたんでせう」

「乘り後れたかな」

恁う言つてる中に三等車の窓から赭色の顔が出た。

「おい此處だ〳〵」

「おう高井」

二人は窓の下に走つた。

「仕様がないのよ、ヤッと起しましたわ」
赭色の顔に重なつて、病後らしい蒼白い、而も兩眼の瞼だけは櫻が
「あら、菊子さん」
「まあ晶子さん」
「久闊ね、御病氣は？」
「もう可いのよ」
「荷物を出せよ」と五郎は窓の下から手を差出した。
「荷物はない」
菊子は最早汽車から降て晶子と並んで話して居た。そして高井が眠つてる
起きなかつた事を語つて笑つた。
「宅の母と好一對ね」と晶子も笑つた。
「早く出て來いよ。何をしてるんだ」と五郎は焦れつたげに怒鳴つた。
「待てよ」と高井は足元を見廻して「新聞は棄てゝも可いとして……洋杖は持つたし帽子は此
にある……」
恁う一々調べる樣にして「いやどうも難有う」と隣の人に旅行案内を返し、其わ
イドの髪針一本を拾つて菊子に對ひ、
「これはお前のだらう」
「捨てゝも可いのよ」と菊子は言つた。
「捨てるべき法がない」と高井は其れを持ちながら漸と車を降た。
「兄さんの氣の長いのには本當に困るわ」と菊子は人々に謝る樣に言つた。
「宅の兄さんは氣が短過ぎて困るわ」と晶子は言つた。

二三

東京で別れてから僅かに十日を過ぎた許りであるが、五郎と高井の喜びは一年も待ち
遐の如く見えた。彼等は二人の妹を忘れたかの樣に勝手に好きな話を續けた。五
郎を肩に掛けて改札口を直先に出る。而して何か食べたいものはないかと高井に訊

あつた。

「何も要らんよ」と高井は答へて、

「今度は餘り長く厄介にならん積だ」

「なぜだ」

「妹も一緒だからね」

「猶ほ結構ぢやないか」と五郎は言つて、「ねえ菊子さん」

「私は何時までも居たいわ」と菊子は兄の方を氣兼らしく見やつて、

「だけれども兄さんが」

「又た例の遠慮か」と五郎は投げる樣に言て、

「菊子さんが可いといふぢやないか」

「併しね」と高井は口の中でいつて「お前は無遠慮過る」と妹を窘めた、菊子はけら〳〵つて居る。

晶子は今まで親しく交際つて居たのだが此の時ほど細かに高井を觀察したことはなかつ

ひよろ長い張り肩の五郎と異つて高井は中肉中脊の而もがつしりした骨格で色は氣忙しなく動く樣な事はなく、何を見るにも凝と面を向けて髓の底まで見詰む、晒しの紺飛白ではあるが、下に襦袢を重ねて襯衣を着た胸元を整然と合せ。なしに揃つて居る。これだけでも何から何まで規丁面の人だといふ事が解る。郎は襯衣もなければ襦袢も着ず素肌に白飛白を着けて兵子帶は胸の方に、脚が、不揃な上前を刎ね返して阿彌陀に被つた海水浴帽までが如何に人だと解る。四人は箕面電車に乘つた。電車は滿員であつたので四人なかつた。東京の人民は流石に智識階級が多く又た大都會人なり

柵取に至るまで老人や子供や婦人に席を讓る事を知つて居るが、

りても股を擴げて席を占領する者が多い。五郎は其れが癪に

りるので吊革の上の横木に手を掛けたまゝ演說口調で叫んだ

明君の中に母や女房や娘や妹のある人は僕等の二人の妹

客は此の奇異な演說にわつと笑つた許りで何人も讓ス

「厭よ兄さん其那事を言つちや」と晶子は眞赤になつて五郎の袖を惹
電車は箕面に着いた。四人は電車を降て又笑ひながら語りゆく。
「兄さんは先に被行やいよ。私達は體裁が悪くて一緒に歩けないわ」と晶子
人の兄の後姿を眺めながら二人の妹は批評し初めた。
「宅の兄さんと貴方の兄さんとは全で性質が異ふのに什麼してあんなに仲が好い、
と晶子は言つた。
「私も爾思ふのよ。性質の異ふ人は却つて仲が好いのかも知れないわ。同じ性
から」
「宅の兄さんには本當に困つちまふわ。あの通りなんですもの」
「でも私好きだわ。宅の兄なぞは始終鹿爪らしい顔をして陰氣で仕樣がないんで
で私を輕薄だのお饒舌だので言ふのよ。私を根柢から矯め直すんですつて私そんな
點があるんでせうか」
「宅の兄さんはね、反對よ。何でも私の爲る事なら凡て可いんですつて、だから私いつか私泥

棒をしても可くつてつ・と言ひましたらねお前の泥棒なら僕は泥棒と思
「私五郎さんの樣な兄さんが欲しいわ」
「でも貴方の御兄さんは私立派な方だと思ひますわ」
「貴方爾思つて？」
「えい、可い方ですわ」恁う言てから晶子は慌てる樣に「正しい方ですわ」と附加へた。

眞清水

一

箕面の翠巒が涼しい風を孕んで綠の上に重なる綠の中に自然木の太い柱が二本、其れが大島家の門である。門の外には充滿に青苔の生えた石の獅子が二基ほど對き合つて居る。これは日清戰爭の折鳳凰城外から持つて來たものを楠侯爵に贈つたものがあつたので大島家に轉贈されたのであつた。五郎も晶子も幼さい時から此の獅子が好であつた。其の大きな鼻や眼や渦卷いた毛並や馬鹿げて見える開いた口、口の中に卿へた毬、背中に背負つた卷毛の尾、其等は頗る滑稽に見えた。五郎が十歲位の時其の上に攀ぢ登つて馬乘りに跨ると晶子は兄さんがお獅子に食はれはしまいかと心配の餘り泣いたものであつた。今日に至つても其事を語り合つては二人は笑つた。

其處に母の松子が肥つた腹を突出して四人の歸るのを待つて居た。

「まあ能く來て下すつた。五郎も晶子も昨夜から什麼に御待ち申したか知れません。」

友の家を訪ねた時其の父母に欵待される程嬉しい事はない。特に親のない者に取つては親友の父母を我が父母とも思ふのである。

「御邪魔に參りましたわ。例年の通り」と菊子は氣輕に挨拶した。恁ういふ場合に何と挨拶して可いか解らぬ實は妹の如才ない應對に漸と安心して只頭を下げた。

「お疲れでせうからね、晶さんお前は菊子さんを御案内してね、風呂が沸いてる。恁ういふ内にも松子は油斷なく菊子の容態を仔細に觀察したのであつた。身丈低いが同じ年頃で病氣勝だと聞いては居るが、左までに瘦せては居らず發達盛りの生の力が張り詰めた腕の肉や首筋や柔かな肩やむつくりとした胸の邊りにも其と眉が狹いので神經質に見えるが、其の代りに口元は何とも言へぬ愛嬌がある。ふ度に口元が少し歪んだり、眼が活々しく動くのが癖であるが其れが却つて此

艶艶しさを加へる一種の魅力であつた。併し銘仙らしい格子ぼかしに飛白のある單衣らしい鶏卵色の帶を締めて背負揚の鴇色が薄白く汚れた結び端を見せて居るのを見た時其れに比べると我が子の晶子は特に高價なものを着てるのでもなく木綿飛白にめりんすの帶で何處へでも飛出して居るもの、何となく凡てが纏まつて清爽して毫も惨らしい點はない。是れだけが兩親のある幸福で、自分で育てた甲斐もあるものだ。

如何なる人の母でも年頃の娘を有つと、他所の娘を見る度に我娘と比較して見る。而して容色が餘程劣つて居ても何處か其の中の比較的に可い處を見出して其れを誇張して見て、私の娘の方が善い」と思つて居るものである。世間は之れを稱して親馬鹿と言ふ、だが親馬鹿は人間の最も美しい情である。

松子が仔細に觀察したのは單に其れだけの理由ではなかつた。

「時に依たら五郎の嫁に」

怎う試驗されてると知るや知らずや菊子は慎かしさうに松子に種々な事を話しかける。如何なる人に對しても直ぐに打解け又人をして直ぐに打解けしむるが菊子の特長である。四人が揃つて奥へ行く後姿を見送つて松子は獨り微笑した。

「なか〳〵上品で快活で善いお娘だ」

此の時向ふから例の奥田父子が阪を上つて來るのが見えた。

「又晶子を貰ひに來だのだらう」と松子は眉を顰めた。

二

富男は眞白い春廣に水色の襟帶を掛け、麥稈帽の下から美しい捲髪を少し露はし銀柄を小脇に狹んで葉巻を燻らし、爪先を上げて反り身に歩くと、後から父の喜平がえつちら上衣の釦を開いて半巾で頸の汗を拭くやら帽子を脱で禿頭に風を入れるやらして

さん」と富男は苛れつたさうに振返つて言つた。

「つたら私は諦めます。併し私は終生妻を娶りません」

「お前の心は充分察するがね、何しろ相手が大島さんだからな」
「誰だつて構ひません。奥田富男は大島隆二の娘を妻とする資格がないと仰有るんですか」
「其れはまあ、お前位になるとな何處へ出してもヒケは取らないのだが、恁ういふ事は餘り急ぐと却つて宜しくないからな」
「急がずに居られるものですか」
と富男は横路の並木の方に足を移して「御父さんは餘り緩慢過ぎますよ」
「私だつて、種々用事があるのでな」
「解りました」と富男は葉莨を草の中に捨てゝ「お父さんは自分の事ばかり急いでるんですわ
「いや爾ういふわけでは」
「いや爾うです。御父さんは御自分の後妻を迎へるために私の嫁の事なんか忘れてるんでせう御父さんなぞは既に三度目四度目の結婚ですから什麼でも可いのです、私は生れて初めての結婚です、人生の第一義の第一歩に觸るゝ大事の問題です、其れを御父さんは自我主義の見地からして……」

よ〳〵富男もう可いよ」と喜平は宥める樣にして片手を目の前で恁うのと、そんな事は富男、そんな事は」
「辯解なさらんでも可いです。御父さんは北の新地の婆ァ藝者ばかり可い人です。私のは眞劍です。晶さん以外には何ものも無いれば私はもう日本に居ません。遠い〳〵北極の無人島へ行くは昨夜も北の新地で赤い襷をして笊を以て鰌掬ひを踊つて居た」
「私は鰌掬ひなんか踊りやせん」
と喜平は揉消す樣に言つて「まあ可いから靜かにしてくれ」
「靜には出來ませんよ。あゝ世間の父が羨ましい。身を犧牲にしてれる。それに……あゝ……」
落膽して根株に腰を下し、帽子を足元に投げて兩手で我が髪をむて來る繼母毎に其我儘に呆れ、半年と居堪らず逃げ去る處から、父

居なければならなかつた。彼は普通の人よりもより強い子煩惱であつ
しむのを見ると我が身に代へても其望みを叶へてやりたい。併し一度二
られた以上は此上に强請する事も出來ぬ、出來ぬと知りつゝも「今一度願
になる。

「私に考へがあるからな、さあ行かう」

富男も澁々立上つた。二人が漸く流れの見ゆる徑まで來た時突然傍らの大木の
けた人があつた。

「やあ奥田さん、いやお揃で」

「あゝ宍戸さんでしたか」

「大島さんへ御出ですか」と宍戸はにやりと笑つて「中々御熱心ですな」

「何がです」と喜平は恍けた。

「晶子さんを御所望なんでせう、併し駄目ですぜあれは」と宍戸は朝日を袂から出して一本を
口に啣へ、「燐寸を御持ちでありませんか」

「どうして駄目です」と富男は燐寸を渡しながら言つた。

「それには中々祕密がありますのでな、併し取るべき方法を以てすれば……」

宍戸は三本目の燐寸で漸く火を點けた。

三

意味ありげな宍戸の言葉に奥田父子は思はず乘り出して問ひ初めた。

「貴方が其の祕密を御存知なのですか」

「無論」と宍戸は唇に蔽さつてる刷毛の樣に黑く荒い髭を上に跳ね上げやうとして摘んだ」

「其れは一體什麼いふ事ですか」

「其れを御聞きになりたいのですか」と宍戸は狡猾さうに二人の眼を見比べる樣に
と笑ひ、

「私の商賣は何であるかを御存知でせうね」

喜平は啞然として口を開いた。

「それを御承知の上なら御相談致しませう」と宍戸は續けた。

元來宍戸健吉なる者は岐阜の產で若年の頃から政黨の壯士となり三百代言もやれば選擧運動で金儲けもするといふ風であつたが、到頭地方の新聞記者となつた。地方の新聞は大抵政黨の機關である處から、反對黨の事は善い事でも惡く書き、自黨の事は惡い事でも善く書かねばならぬ。新聞そのものゝ根本が既に利害と感情とで筆を左右する樣に出來て居るから其れに習慣づけられたる記者は自然に社會全般の出來事に對しても不純な觀察を弄する事になるのみならず左までに學問もなく經驗もなく只だ鼻息ばかり荒い宍戸の樣な人物が新聞といふ利器を自由に使用するといふのは狂人に刃物を持たせると同樣である。彼は土地の遊廓移轉問題を利用して一攫萬金を企てたが計畫が齟齬して終に其土地に居られなくなり大阪へ流れ渡つて週刊の新聞を出して各商店に廣告を强請つたり一方祕密探偵社といふ看板を揭げて種々な惡辣な手段で金儲けをして居る。併し彼は職業に對しては極めて忠實で一度引受けた事件は必ず完全に遂行するまでには如何なる危險をも辭した事はない。此の點に於て頗る重寶な人間と見做されてゐる。世の中には多數の人民の利益となる立派な仕事をしながら金を儲けて居る者もあるが、是

と反對に社會の害をなしつゝ金を儲けて居るものもある。此の二つが現今の二大別である。而して宍戸は第二の方に屬する。

今奧田は宍戸の口の端に引掛つた事に氣が付いたが左りとて晶子孃を貰へるか貰へぬかの一大問題に就ては此の儘に捨てるのも心殘りである。

「無論、祕密を聞かして貰ふには相當の謝金は惜みません」と彼は言つた。

「よろしい解りました。其れでは先づ私から御訊ねしませう。貴方は晶子さんを細君に御迎へしたいのですね、確かに」

「爾です」と富男は答へた。

「處で大島さんで承知をなさらない、其の理由を知りたいのですね」

「爾です」

「貴方は學歷もあり洋行もなすつたし、移民會社の重役でもあり、御父さんには亡ある。して見ると大島さんが貴方を拒絕なさる理由がないのです」

「私も爾思ひます」

「のみならず貴方は美男子で在被やる、交際も巧い、或は晶子嬢が貴方に戀してるかも
せん」
「爾いふ事もないでせうが」と富男は生やし立の短い髭に爪を立てゝにやりとした。
「いや確かに爾です。晶子さんの心は私がちやんと内探して知て居ます。然るに此の緣談が出
來ぬといふのは……」
「什麼いふ理由ですか」
「お待ちなさい」と宍戸は折鞄から活版刷の規則書を出し、「緣談に關する祕密調査は手附金と
して五十圓を頂戴します」
「なる程」と喜平は詮方なしに紙入から五十圓を出して渡した。
「確かに」と宍戸は五枚の紙幣を指で彈きながら「其れは晶子さんと結婚すべき人が既に決ま
つて居るんです」
「誰ですか其れは」
「其れは」と宍戸は咳拂して「私は既に決まつてるだけの報告で御免を蒙りたいです。若し當
人の名を知りたいなら、其れは先方の大祕密ですから更に手數料を戴かなければなりません」
「よろしい」と富男は自分の紙入から五十圓を出した。
「確かに」と宍戸は再び言つて紙幣を納め「婚になるべき人は兄の五郎です」
「なに？」と父子は吃驚して刷と激昂の顏を赧め。
「馬鹿な事を、兄妹が結婚する事が出來ますか」
「さあ其れは貴方方の知らん點がある」と宍戸は落着き拂つて「晶子さんは大島さんの實子ゝ
はないです。これは特別に御負け申します」
「ぢや誰の子ですか」
「尋つて下さい。其の規則を御覽下されば非常の大祕密は一千圓とありま
す」

四

圓に五十圓！百圓の手數料を取つた上に更に千圓を取らうとする宍
に顏を見合せて躊躇した。

「いや其の必要がないと仰有るなら私も押賣は致しません。實は此の事に就がありますので私が依頼されて居るのですから、私としては何方に賣つても差支勿論私には晶子嬢を手に入れるべき胸算が整然と出來てるので千圓の手數料の中には傳授料も籠つてあるのですが・・・では失禮します」

平然として去らうとする宍戸の手を引いて富男は慌たゞしく言つた。

「金は惜みません、晶子さんさへ私の手に入る見込があるなら・・・」

「無論見込のない事は申しません。では千圓頂戴しませう」

喜平は小切手を書いて宍戸に渡した。

「では重大なる祕密から申しませう」と宍戸は小切手を大きな嚢口に入れて、「晶子さんは誰の子だと思ひなさる」

「解らない」

「爾でせう、それは私より他に知るものはありません。元來何が面白いと言つて他人の祕密を探偵する程面白い事はありません。中にも上流社會は中流以下より祕密が多いのです。立派

な道徳家といはれてる人が妾二人も圍つて置いたり、花嫁花婿と新聞で寫眞に出されてる花嫁さんに私生兒があつたり花婚は梅毒病院に通うて居たり、姦通や、墮胎や戸籍法違反やいろいろなことを知る度に暗がりで金剛石を拾つた樣な氣がしますよ。其中で最も愉快なのは婦人問題で・・・」

「兎も角祕密を早く言つて下さい」と富男は焦れつたさうに言た。

「まあ順々に話しませう、要するに婦人問題は・・・」

「其れは後で伺ひませう」と喜平も言つた。

「爾ですか」と宍戸は其の四角な顔の腮を手巾で拭いて「要するに晶子さんは楠侯爵の胤です。これだけで千圓の價値がある積です」

「楠侯爵の？」と二人は吃驚した。

「爾ですよ、侯爵が若い時に某藝妓に孕ました其の子は晶子さんです。

て我が娘として育てたのは大島さんです。だから晶子さんの身體は侯るので大島さんと雖も自由には出來ないのです」

「楠侯爵の……」と富男と喜平は同時に繰返したが、此の時二人の眼と眼が急に男の戀は益々募つた。侯爵の令嬢を我が妻にする事が出來れば自分の榮達が思ひの喜平は直ぐに恁う考へた。楠侯爵と緣を結ぶ事になると如何なる會社でも事業でもに出來る。

戀と慾とが二人の感情をせり上げて空想は更に空想を生んだ。宍戸は用心深く二人の顏色を窺いて冷やかに言つた。

「楠侯爵の令嬢を御迎へになるのですから是は千圓位では廉過ぎますよ」

「全くです」と喜平は扇子を動かして「併し成功するでせうか」

「必ず成功します」

「どうして？」

「私の意見を申しませう。大島さんが今日の位地を得たのも侯爵の後援があつたからです。其れは貴方も御存じでせう。そこで大島さんは猶ほ其上に侯爵を捕へる爲めに我が子の五郎と晶子さんを結婚させやうとして居るのです。だから五郎と晶子さんの結婚を止めさせる方法を考へる事が第一の急務です」

「無論」と富男は言つた。

五

「まあ御聞きなさい」と宍戸は熱心に「二人の間を割くに什麼すれば可いと思ひます」

「人を離間するのは善い事ではありませんな」と喜平は言た。

「貴方は道德家で被居やる」と宍戸は冷然として「併し二人の間を割かなければ侯爵の令嬢を手に入れる事は出來ません。道德の爲に御令息の戀を捨てさせなさるか」

「生存競爭は道德よりも大なる自然の規定です。小さな事は構つて居られません」

つた。

「爾でせう、解りました。貴方が其の氣なら此に三つの策があります。第一は五郎との間を中傷する事です。第二は大島と侯爵の間を割いて貴方方が侯爵を擒にする。三は二つの策が行はれざる場合に晶子さんの實母を探して手に入れ其れに依つて作

事です」

「併し私は一文なしから大島さんのお世話で是れまでになつたのですからな」と喜平は帽子を脱て笊蕎麥の頭をつるりと撫でた。

「御父さん、其れは古いです世渡りの上に於ては恩や義理はほんの物件に過ぎません。物件を借りたら物件で返せば可いのです」

「併し其れはね……」と喜平は鈍鈍して言た。

「まあ御父さんは默つて居て下さい。兎も角協議なんですからね」

「それも爾だらうけれどもな」

「宍戸さんの策は三つとも上乘です。其れに就て何れゆつくり御相談しませう」と富男は父の方へは顰め面を見せて宍戸に向ひ、「今晩私の宅へ御出が願はれませんか」

「今晩は他に約束がありますが、明晩伺ふ事にしませう」

「では爾いふ事に」

「處で此れが成功の曉には」と宍戸はにやりとして言つた。

「成功の曉にはですか」と富男も微笑して「貴方の規則書にありませんか」

「規則には相當の謝禮としてあります」

「では一萬圓」

「侯爵の婚になるのに一萬圓ですか」

「よろしい十萬圓として置きませう」

「……しました。十萬圓、では左樣なら」

……ら」

……富男と握手を交はして木間に去た。

……掛つちや敵はん」と喜平は言た、「五十圓が二つに千圓取られた」

……のですよ」

……た時木間から美しい女の合唱が聞えた。

……馬の首の鈴、ちんからかんと鳴り渡る、日は……

中形竹の葉模樣の浴衣に水色地麻形の單帶を締て魚……

……た

地に納戸で菊の花を飛ばした浴衣に赤味の入つためりんすの帶を締め魚籠を提げた菊子が早子を揃へて半笑ひながら歩いて來る、茂り合つた青葉若葉の隙から日の光がぱつかりと折り柾り虹の樣に二人の顏や肩に漏れた。

「やあ御嬢樣」と富男は横合からひよいと飛出して「何方へ」

「あら奥田さん」と晶子が立停まつた時富男は鼻目鏡を地に落した、惶てゝ拾ひ上げ其れを掛けやうとしたが低い鼻には支へ處がないので再びつゝるりと落ちる。背後に立つた菊子は思はず、「ぷッ」と噴飯だした。晶子も笑ひたさを怺へて眞赤になりながら菊子の袖を惹いたが、到頭怺へきれず二人とも逃げ出した。五六間も走つた頃に振返ると富男は未だに鼻眼鏡を落しては拾ひ拾つては又落して居た。

六

午後三時頃の太陽は黄紅色を萬樹の上面に浴びせて綠の葉も茶褐色の幹の色も光の海に渦卷いて居るが、下蔭は一向平氣で濃かな葉の影や齒朶や、青苔の花咲く濡色の岩や、其れ等は冷

冷とした風に吹かれて背中の汗が肌に冷たい。晶子と菊子は又た唄ひ續けた。

「王樣の馬は黄金の馬、お供の馬は泥の馬、ほがら〳〵と首の鈴、雲に響くを何と聞く」

突き出た岩に蔽さつて一本の合歡の大木が薄青い髪の上に桃色の簪の樣な花が咲いてる處に二人は立停まつた。

「此處で待ちませう」と晶子は言て遙かに「兄さん！」と呼んだ。

「おうい」と兄の聲が聞えて。間もなく五郎と實の姿が現はれた。五郎は薄い襯衣に白のランニング洋袴を穿いて頭に大きな經木帽を被り其上を手拭で縛つて顎に掛けて居た。實は着て居た白飛白の儘で矢張りきちんと帶を結び餌箱やら魚籠やら莖蓙やらを肩に荷つて其の後から松子が肥大な身體をえつちらおつちら運んで顏中を汗だらけにしてふう〳〵つて居る。

莖蓙を日陰に敷いて一同は休んだ。紺碧を湛へた流れが木々の色を映してちよろ〳〵て行く、底も見える樣な淺い處には石の上を走る鮠も見える。こんもりと深い處には中を見せる山女も居る。薄綠の鮎らしい魚の腹は白く水の隈に光る。

「居るぞ〳〵」と五郎は子供の様に勇み出した。
「待ち給へ、鈎に餌を付けて」と實は悠然と鈎を檢め其れから餌箱に少しばかりの水を遣り、次に一つ〳〵の餌を檢ためて釣竿を一振一振り振つて見てから糸を指の先でしごいて漸つと餌を付ける。
「自烈體な、早くやれよ」と五郎が言ふ。
「爾那に慌てるなよ」と實は言ふ。
「兄さんは氣が長いのよ」と菊子は笑つた。
「網でやらう、晶さん網だ」
五郎は網を取て立ちかけた。
「君、網は駄目だよ、一度に多く捕るよりも一尾づゝ釣る方が勝だよ」と實は猶ほ釣竿を立て浮標の位置を考へながら言つた。
「いや、僕は面倒臭い事は嫌ひだから」と五郎は笑つて「慾張連は僕の方へ御出」
「私、網なんか厭だわ」と晶子は言つた。

「私慾張だから行きますわ」と菊子は直ぐに五郎の後に從いて崖を降りた。崖を降りるはきやつと叫んだが直ぐ笑ひ聲が聞えた。
「滑べつたんですよ屹度、彼奴は粗忽者だから」と實は竿を振て「御嬢様、これでやつてなさい僕は蚊鈎を遣ひますから」
「御母様は?」と晶子は珍らしさうに竿振りながら言た。
「私は好いものを捕て來ますよ」
と松子は微笑して言た。
「なあに?」
「河鹿を捕ります」
「御母様にや捕れませんわ」
「いゝえ私は頃日も來てちやんと河鹿の居る處を見て置きましたから」
母が崖を降りて例の合歡の背後に從いて反對の崖から山蘭の繁り河岸の岩に腰を下した。

「どうすれば可いの？高井さん」
「僕の通りに御やりなさい」
實はすゝと竿を鳴らして綸を飛ばした、綸は流れに從つて下る。下り盡きた處で再び綸を飛ばす。
「綸で水を敲いてる樣なものですわね」
「爾です、流し釣は是です。だが貴方のは默つて流れても其儘にしてお置きなさい、で私は二三間下の方に居ますから」
「私一人になるの？心細いわ」
「いや直きそこに居るんですから、御用があつたらお呼びなさい」
恁う言てる時屈曲した河岸の茂りの中で五郎と菊子の聲が聞える。
「そら〳〵逃げた、右へ〳〵、いや左だ。やあしまつた、もう一返もう一返」
「あゝ掛つたわ〳〵、あら下を潜つたわ」
其の騷々しき事、恰も大掃除の樣！

「あの人達は今に網を捨てゝ手攫みに掛りますよ」と實は笑つた。

七

ほんの一二間離れて實は頻りに釣竿を動かして居る。晶子は默つて綸を垂れたまゝ
めて居る中に實は既に瞬く間に籠を二三尾釣つた。
「あら又た釣れたの？」と晶子は其の度に驚歎して、嬉しさうに魚籠を覗い
晶子の方へ來て餌を檢ためてやつた其れは如何にも什麼かして一尾でも釣
ふ風に見えた。彼は竿を手に取つて釣り方を敎へた。而して其他二三の
敎へられた通りに沈默を守つた。水は綠の上面に銀色の波を跳らして、
つさつと涼しさうに過ぎて行く。天は青藍の晴れ渡つた夏の色で、
の綠は鳴を靜めて只だ折り折り思ひ出した樣な葉末の微かな顫聲
の聲と遠くの〳〵何處かの一本の大木に集まつてる蜩の聲の
な空氣に溶け合うて深山の閑寂さに復るのであつた。

「私が恁うして居る、高井さんが彼處に彼樣して居る」と晶子は考へ、
靜かさの中に包まれて居るのは此の二人きりだといふ樣な氣がしたから
「若し此の世界中に生きて居る人間が高井さんと私と只二人きりだつたら
分淋しい。併し隨分氣樂かも知れない、氣樂でも淋しいのは厭だ。併し若
は……」
彼女は不圖大きな聲で「はゝゝ」と笑つた。
「爾だアダムとイブが爾だつたのだわ」
「釣れましたか」と實は晶子の笑ひ聲を聞いて勇んで走つて來た。
「いゝえ」と晶子は答へて「アダムとイブの樣だわね」と彼女は空想から醒めぬ樣に
「何がです」
「たつた二人きりだつたら」
實は默つて晶子の顏を見詰めたが直ぐに眼を反らして額に手を當て其儘逃げる樣に自分の席
に復つた。其の後ろ姿を見た時晶子は突然耳根まで赭くなつた。彼女は空想から醒めると同

に曾時兄に言はれた事を憶ひ出したのであつた。
「あゝ私飛んでもない事を言つてしまつた」
彼女は其ればかりが氣になり出した。何と言つて取消さう、いや取消すと
儘にして置かう。千々に思を碎いてる中に釣竿がする〳〵と石を滑つた。
「あら」
恁う言つて彼女は手を伸ばさうとする途端に身體の重みに片手を突いた
出した途端に走り來た實の手が晶子の帶に觸れた。
「大丈夫です」
「あゝ危なかつた」
晶子は漸と身體を起して手巾で手を拭いた時實の手が未だ確乎と自分の
感じた。
「難有う、お蔭さまでしたわ」と晶子は驚愕から轉じた感謝の眼を實に向
「危なかつたですな」

「えい、竿が滑つたもんですから」
「魚が曳いたんぢやありませんか」
「さあ什麼ですか、私空想に耽つて考へたもんですから、……竿は？」
「流れたでせう」
「おや貴方の竿もないのね」
「僕も流しました、魚釣は誰でも空想で失敗しますよ」
「貴方も空想に？」
恁う言た晶子は又してもはつと氣が付いて顔を赧めた。背後の岸で五郎の聲が聞える。
「これや魚を捕るより泳ぐ方が可いなあ」

八

言ふ事毎に晶子は顔を赧めた。今までは兄と同樣に冗談も言へば、庭球もやり競爭鬼ごつこ腕角力まで取た仲だ。遠慮も氣兼もあるべき筈がないのに一度び結婚の話を聞いてから急に二人の間に垣根が出來た樣な氣がする。無論此の事は實が知るべき筈がない。種々に氣を揉むのは自分獨りだとは思ふものゝ、男女の間は神經質に考へると是れほど危險なものはない危險を知らぬ中は兄妹の樣に睦しく出來るが、其れを知るが最期、もう正面に顔を見る事すら出來ない。

これが私の良人になる人か知らん、と考へると晶子は今まで知らぬ羞恥の中に好奇心も加はり、質や何かを研究して見たいといふ氣も、

二人の言葉が途絶れた。實は例の如く眼をして水面を眺めて居る。いつまでも事は晶子に苦しくなつた。左りとて言ふ事も出來ない。

釣竿が何處へ流れたでせう」と彼女は言た。
「さあ、流れが急ですから」と實は答へた。
「でも面白かつたわね」
「明日でも又參りませう」
「えい是非ね」
怎ういふ改まつた對話は直ぐに盡きてしまつた。で晶子は話頭を轉じた。
「菊子さんは今度何處へ被行しやるの？」
「妹ですか、あれは女子大學へ行きたいと言て居ますが、さあ什麼なりますか」
「私も女子大學へ行きたいと思ひますのよ。菊子さんと御一緒なら嬉しいわ」
「併し其れは出來ますまい」
「什麼して？」
「さあ、目下考案中ですがあれを學校へやると僕が退學しなけりやならないんですからな」
「どうして？」

「二人分の學資がありません」
「あら」と晶子は大變に惡い事を聞いた樣な氣がした又も顏を赧め、
「學資位は什麼にかなりますわ、失禮ですけれども私は父に話をして……」
「難有う、併し僕は人の助けを受ける事を好みません」
「怎那に御懇意な間柄だから可いぢやないの？　さあ其れが什麼もね」と實は弱つた樣
して「學問といふものは他人の補助を受けてするものでないと思ひます」
れども今まで怎うやつて來たのも父が少しばかりの田地を殘してくれたお
は頃日から怎う思ふのです。學校で學問をした處が何にもならない。智識
の人格を高めるのが目的ですから、此の點に就ては學校は左まで難有い
から僕は學校を止めて妹だけを學校へやらうかと思ふのですが、其れに
問をして將來は什麼なるでせう」
「矢張り家庭の人になるにしても一通りの學問が要りますわ」
「處が家庭の人にもなれないのです」

「どうして？」

「御嬢様、僕等兄妹は日蔭者なんですよ」

恁う言た實の眼は露に光つて居た。晶子は默つた。實は肩を動かして長い溜息を吐いた。

例に似ぬ熱氣を帶びた調子で語り續けた。

「僕は貴方に御話したいと思つて居たのですけれども……併し止しませうか」

「いゝえ私が伺つて可い事なら聽かして頂戴」

「簡單に言ふと僕の父は燒けて死んだのです」

「あら什麼して？」

「言ひませう、是は是非貴方に聞いて頂きたいのです」

實は晶子の傍に坐り直した。

九

「貴方は三十年勤續の小學校教師が御褒美を貰つた事が屢新聞に揭る事を知つてゐるでせう」

と實は靜かに言つた。

「えいちよい〳〵見ますわ」

「僕の父は其です。僕は爾いふ事は善い事か惡い事かは知りません。政事なんでせう。僕の父が其れだけ兒童教育に熱心か否かも僕には解りま厚篤實の人でした。僕の鄕里は水戸の片田舍です。水戸派の學者は忠君としたので其の餘風が殘つて居ました。父は母に別れてから僕と妹と一て後妻を迎へませんでした。僕の幼さい時に父は木綿の黑紋付羽織に袴居たのでしたが其の中いつの間にか詰襟の洋服を着る樣になりました。服を新調しなければならないといふので大分頭を惱ましたらしいが、到刀劍を賣つて靴や洋服を作りました。學校は田舍の事ですから木造では後に松原を前にした日當りの可い廣々とした土地で井戸が非常に深くて一たい水が出ました。學校の生徒が殖えて來るに從つて今まで父が校長で間もなく東京から高等師範出の大變に豪い人が校長になつて來ました。

が來たので頗る不平であつたけれども父は非常に喜んで、學校の名譽だと言つて村中の人
めて歡迎會を開きました。と間もなく御上から御眞影を頂戴しました。其の頃からだん
ます學校に當直を置く事になりました。當直料は一夜に十錢を貰ふのです。若い教師達
にこれを厭がりました。父は誠に儉約な性質で毎月月給を殘して貯蓄した筈です。そ
十錢を貰ふのが嬉しさに他の人々の代理を勤めて當直をしたのです。妙な話ですが
きでした。母が死んでから夜になると眠られぬ處から五勺づゝ寢酒を飲んだのが、
つて一合づゝ飲む事になりました。一日の疲勞と一合の酒で生體なく眠るのです。
飲むのは不謹愼だといふので、校長に伺ふと校長は不眠病の藥だから構はぬ。無論祕
といふのでした。と或夜僕と妹は父が當直なので年老つた伯母さんと三人で枕を並べ
した。恐ろしく風の吹く寒い晩で、外行く人が氷を降む音がカン〳〵と響くのが聞えま
とうとうとすると伯母が慌てゝ僕を搖り起します。火事だよ實、火事だ。同時に半鐘の音が聞え
ました。僕は十五で妹は十の時です。何處だ〳〵と往來の人が騷ぎます。學校だよと家根の
人が言ひました。僕は跳び起きて一散に學校へ駈け付けました。現場へは未だ幾人も來て居ま

せんでした。

「御父さん〳〵」と僕は聲を限りに叫びました。學校の三年生の
ひ合つた建物を晝の如く明るく照らして居ました。僕は當直室へ
小使室へ行くと小使は女房と子供を伴れて夜具を引被つて逃げ
「御父さんは？」と僕は聞きました。
「知りません〳〵」と小使が言ひました。僕は不圖氣が付きま
けました。其處にはもう火が隣室まで燃え移つて居ます。と見え
に鍵を鍵穴に合せて居ます。鍵は凡そ二三十も繋いであるので、
父の手は顫へて居ました。白髪交りの頭が火に照されて狂氣の如
ても扉が開きません。父はよろ〳〵と蹌踉めいて身體が右左に傾
れる音がして眞赤な火柱が廊下に倒れて來ました。僕は夢中に分
した。

一〇

實が此處まで語つた時恰ら追懐の情に堪へざるもの、如く眼を霑ました居る。水の流が靜かに〳〵岸の木影を搖かして行く、實は續けた。

「背中に負はれた父は狂氣の如く下せ〳〵御眞影を出さなきやならんと手るのです。併し私は一生懸命でした。私は火が既に御眞影の奉安室に移御眞影も大事だが父の生命も大事です。のみならず最早室の中から天井を燃たので迚も御眞影を捧げ出す事が出來なかつたのです。私は一散に走りまし隅に父を下しました。父は最早や爭ひませんでした。恐ろしい音を立て、炎に樓閣が倒れました。父は喪神者の如く其れを見て居ました。一言も言ひません。防に盡力する中を私は父を扶けて家へ歸りました。

私は疲れきつて直眠りました。其れでも父の事が氣になるので折り〳〵眼を父は床の間に掛けた兩陛下の御眞影の前にぴたりと坐つて兩手を疊に突き頭を低

て居たのでした。私も悲しくなつて泣ました元來父は水戸派の學風を受け一て篤かつたのです。或日東京の新聞紙が兩陛下の御肖像を石版摺りにして時、父は非常に怒りました。尊とき御眞影を賣りもの、景品扱ひにする言て右御肖像を全部買ひ占めて神社へ納めやうとしたが貧乏なので其れ父は東京へ出ると必ず二重橋の前に二時間餘りも跪づいて禮拜するのが至尊に對して熱烈な愛を有てる人はあるまいと思ひます。其れは殆んど幼さい時から楠公や清麿の話を聞かされました。高山彦九郎の話をす屋根が雨漏をした時代だ、そこで高山彦九郎先生は・・・」といふ風にて遂に自分で泣いてしまふのでした。

父の氣象を知てるだけに私は此の凶變の結果を考へますと、もこした。學校の教師達や校長から頻りに父に直ぐ來いと使をよこしづいたきり身體を動かしません。丁度夜が明け放れて火事場歸り團の上に寒さに顫へながら父の姿を見詰めて居ました。

「いづれは陛下に捧げました生命でございます。今は死にません、御ゆるし」

父は恁う言つて又泣きました。それから急に袴を穿いて火事場へ行きました。

氣を知つてる教師達は父を庇ひ父を慰めてくれました。

「放火だらうね」と校長が言ひました。

「私の責任でございます」と父が言ひました。

「教室から出たのかね」

「私の責任でございます」

「小使が火鉢を能く氣を付けなかつたのだらう」

「私の責任でございます」

「高井さんはお寢みになつて居たのですか」

「私の責任でございます」

「火事だと解つたのが晩かつたのですか」

「私の責任でございます」

「併し御眞影だけは捧げ出す事が出來さうなものでしたね」

「私は酒を飲んで寢みましたので」と父は狂的に叫んで大地に坐つ

「さあ此の不忠者を打つて下さい。踏んで下さい。世の中の見せしめ

人々は默りました。

一一

年は若いが校長は慈仁深い人でした。彼は今父が自分の口から酒

に驚いて揉消す樣に言ひました。

「高井さんは不眠症だから葡萄酒を少し許り飲んだのでせう。酒は一

知らん」

「いゝえ校長さん、私はあの時は餘り寒いので二合ほど飲みました

「いや其れは一昨夜御宅で飲んだのを間違へて覺えてるんでせう」

と校長は故意と笑つて。

「貴方の當直の時は私はいつでも一番安心して居りました。これは本當に悪く私が風が吹くから特に貴方に當直を御願したのですが」

「いや私から御願したのです。當直料が戴ければ一合買へるもんですから人々の中にはくすりと笑つた人もあつたが、直ぐ嚴肅な靜かさに復りました。

「仕方がない」と校長は父の餘りに潔白なのに感動して「私は貴方を尊敬!」た。而して「私は第一に進退伺を出す事にしませう」と言ひました。

此の事件に就ては幸ひに校長も父も極めて寛大な處分で濟みました。父は、聽き屆けられません。校長や教師や村の人々は擧つて父の留任を勸告して、父はどうしても聽きませんでした。

「御上に對して大不忠を働いたものが兒童の教育を掌どる資格がありません」いつも恁う言ふのでした。私は記憶して居るのは校長と父との問答です。これを動かした事はありません。

「貴方は三十年間貴方の手に依つて教育された此の村を捨てる氣なのですか」と校

長は

「捨てはしません。益々教育の勤めに勵むつもりです」

「併し教頭を辭しなさるのは」

「不忠を働くと此那事になるぞといふ手本を示すのです。村の人達は段々御上に對しても疎略になります」

「貴方は不忠ではありません」

「酒を飲で職務を怠るのを不忠と言はれませんか」

「貴方が忠君の念の強い事は何人も知つて居ます。職務君のためです。職務は職務で忠君は忠君と別々にすると

「いや、私は別々に考へたくありません。日本人民が職くも左を向くも寢るも起るも陛下の御蔭ではありません。

校長は默つて歎息しましたが、嘘て「併し高井さん、」いふわけでなし、其れにお寫眞の事ですから政府でも實

が」

「其れが不可せん」と父は每もの溫厚に似ず聲を勵まして言ひます。私は御眞影を紙で作つたものとは思ひたくありません。今の
なら其れは大變に恐ろしい事です。御眞影は玉體です。私はくれ
眼が覺めると身を潔めて先づ床の間の兩陛下に御挨拶を申上げも
陛下に御挨拶を申上げます。二六時中私は陛下に拜謁して居ま
汚し奉るなんて私は生きては居られません。自殺をするのが
育家です。陛下に捧げた身體を自分で殺す樣な事を人に敎へた
が付くまでは生きて居ます　屹度御詫を致します」
恁う言つて父は泣きました。校長も泣きました。村の人達は

一二

父は其れから酒をふつつりと止めました。夕方になると每も淋

のが今だに眼に殘つて居ます。學校を辭めたので內職に繪を畫きました。其れは重に
神武天皇だの楠公だのが得意でした。父は亦た表具も上手でした。今でも私の村へ行きますと
神社やお寺に父の畫いた額が殘つて居ます。私は折り折り夜中に眼を覺ますと父の讀書の聲が
聞えます。
「外史氏の曰く我れ舊史を讀んで事の此に至るに及び未だ嘗て筆を投じて歎ぜずんばあらざる
なり……」
父の聲は音吐朗々として夜深に響き渡ります。王室の式微を慷慨して武門武士
橫を罵つた山陽の名文は父の金科玉條であつたのです。吟じゆく中に感極まつて
した。私は此の聲を聞くと何となく惹き入れられる樣な氣がしました。山陽の文
いふ處だけが氣に喰はぬと父は言ひ〳〵しました。
「天子を挾さんで四方に號令すとある、挾むといふのは擁してと改めなければ何
樣な氣がする」
私は其那事を聞ても實の處、面白くも何ともなかつたのです。

三月の後に又た〳〵御眞影が下賜されました。父は淨心潔齋して奉迎に參りました。其の日の歸つた時の嬉しさうな顏と言たら何とも譬へ樣がなかつたです。そこで父は村會へ出掛け建議をしました。

「木造の小學校に御眞影を安置するのは宜しくない。村費を以て特に土藏を造り其處を御眞影所として下さい」

恁う言ひましたが、何分經費の要る事だから主旨は贊成だが何れ時機を待つ事となりました父はそこで第二の案を提出しました。

「御稻荷樣や聖天樣などは迷信である。あんなものに御堂を作つたり金を掛けるよりも此等の堂を合併して御眞影所となし、それに村民が毎月禮拜する樣にすると火災の危險がない」

此の案も日本全國中に例のない事だからと言つて否決されました。それからといふものは父は毎日欝ぎ込んで居ました。或日父は私と妹を呼んで恁う言ひました。

「此にある本に恁ういふ事が書いてある。一人の子供が腕白で仕樣がない。そこで其の御父さんは子供が惡戯をする度に柱に釘を一本づゝ打ち付けた。一と月の後には柱が釘だらけになつ

た。そこで御父さんは子供に其れを見せてお前が善い事をしたら一本づゝ拔いてやると言た。子供は心を改めて善い事をする樣になつた。釘が段々に拔けた、終りには一本も無くなつた。子供は大變に喜んだ。すると御父樣は恁う言た。釘は拔けたが痕が消えないぢやないかるのは是れだけだが是は西洋の本だ。お前達は什麼思ふか」

消えないと困りますな」と私は悄氣返つて言ひました。

ない位なら拔かなくても同じ事だわ」と妹が言ひました。

ないものを消す法がある」と父は言ひました。

掛けるんですか」と私は訊ねました。

「鉋を掛けちや細くなる」と父は言ひました。

「何か塗るの？」と妹が言ふ。

「それはゴマカシといふものだ」と父が言ふ。

「ぢや什麼すれば可いんです」

「考へて見ろ」と父は席を起ちました。私も妹もいろ〳〵に考へたが解らなかつ

實際私は一度惡い事をするともう生涯疵が癒らないものだとすれば大變な事だと思ひ其れになつて堪りませんでした。

一三

釣の話は到頭考へ出せなかつた。其の晩私達三人は食卓に就きました。

「今朝の宿題が解つたか」と父が言ひます。

「解りません」と私が言つた。

「新しいのと取替ると可いわ」と妹が言ひました。

「其れだ」と父は箸を捨てゝ膝を打ちました。

「菊子能く言つた、其れだよ」

私は不承知だつたのです。

「お父樣、新しいのと取替ると、其の柱だけが新しくて釣合はないぢやありませんか」

「釣合はなければ、家を全部新しくするんだ」

「あつ」と私は思はず聲を立てました。一本の柱に疵を付けたならない。小さな罪を償ふに絶大の犧牲を拂はなければならない。

其れは四月の花時でした。村の人は皆な島に出て菜の花の咲いました。土は眞黑に耙かれて、馬や牛の背中に暖かい日が當る。恁舍に生れたものでなければ解りません。日がとつぷりと暮れきに出て居ます。私と妹は野に出て植物の採集をして家に歸つたです。夕飯に少し後れたので父の機嫌が惡からうとかでした。父は山の薯を掘て來てとろろを作つて居ま

「さあ、うんと食べろ」

父は摺木を摺鉢に入れたまゝ食卓の前に運んで、鍋の長閑さに窗外は明るいが家は暗かつたのですが父は極めてにこやか

「火事かしら」

父はがらりと箸を捨てゝ飛出しました。

汁を盛てくれました。と此時春

「學校だ」

私が飛出した時に父は既に一丁も前を走つて居りました。老人の走る形は實に變なもので首と胴が眞直になつて動かず、手と足ばかりが機關人形の様に動きます。帽子も被らず禿た腦天だけが白く見えます。私は直追ひ着きました。

「先に行け、御眞影を〳〵」と父は喘ぎながら叫びました。私は眼が眩むほどの速力で走りました。學校の玄關が盛に燃え上つで居りました。元來今度の新築は念に念を入れたもので、御眞影所も校長室と續き合の別室で三方だけを煉瓦にしました。其扉は鐵製にするつもりであつたのが、東京から其れが來るまで欅の厚板にして居ました。私は第一番に中に入りました。而して直に御眞影を肩にした時、入口は既に火に包まれました。恐ろしい黑い煙と鉛色の煙とが充滿に漲り出して欅の板は眞紅な火にちよろ〳〵と舐められました。私は逃げるに逃げ路がありません。此時ほど私が困つた事はありません。私はもう煙に噎せて顔を上げ[illegible]ないのです。硝子窓に火の光が反射して非常に美しかつたです。

「もう駄目だ」と私は思ひました。私は床板に顔を押し付けて呼吸しました。其れさしくなつて來るのです。若し私が私一人だつたら此の儘死んだのかも知れません。[illegible]

考へて見ると、これが私の一生の教訓になりました。

「御眞影を擁てるんだ」

此の考へが稻妻の如く私の頭に浮びました。

「これを燒いちや申譯がない」

父が曾て御寫眞も玉體も同じ事だと言つた時私は其れは餘りに誇張過るよ火焔に包まれた私は實際御眞影は玉體である様な氣がしました。同時に玉體けるのは自分の責任であると確信しました。

「陛下の稜威に依つて此の火を逃れしめ給へ」

しました。私は奔馬の勢ひを以て硝子窓に私の身體を突き當てました。[illegible]て煙がどつと出ました。私は直其處から飛び降り様とした時「寶！寶！」と叫ました。

〳〵」と私は大きな聲で言ひました。

「大丈夫かへ」
直足元に父の聲がしましたので私は吃驚しました。

一四

御眞影を抱いて窓から飛降りやうとした一刹那に父の聲を足下に聞いたので私は直ぐ呼びました。
「早く御出なさい」
「よし〳〵お前早く出ろ」
「此處です〳〵」
「解つた、早く飛び降りろ」
私は父が窓に手を掛けて這ひ上る處を見たので直飛び降りました。
「御父様」と私は下から呼びました。答がありません。「御父様、御父様、御父様！」と私は狂氣の如く呼びました。窓が高いので攀ぢ登る事も出來ません。私は直に火の粉の中を潜つて廣

庭の方へ出ました。而して其處にうろ〳〵してる校長に御眞影を渡して直ぐに元の處へうとしました。
「何處へ行く」と校長が言ひました。
「父が御眞影室の火の中に居ります」
「救うてやれ〳〵」と校長は御眞影匣を頭の上に翳して「高井さんを、
ました。消防手四五人と私は直ぐに窓の下へ行きました。煉瓦は、
と崩れました。此の時室内に異樣の聲が起りました。私は初めて
に「兩陛下萬歳！」と明晰と聞えました。これは他の人々には聞
私には能く解りました。
「まだ生きてる」と私は嬉しさに胸を跳らしました。煉瓦の穴か
です。
「もつと〳〵〳〵」と私は消防手に言ひました。煉瓦が大きな響
「萬歳！」

聲が暗の底に唸る病人の樣に聞えました。

「御父樣、御父樣！」

私は煉瓦の穴から火光に照される父の姿を見ました。父は端然として坐つそして首をぐたりと低れて居ました。

私は直ぐに父を肩に扶けました父はぐにやりとなつたまゝ聲がありません。父の胴を持て私に背負はしました。私達は漸との事で廣庭へ歸りました。父はです。

水を飲ませ、活を入れ、醫者も來たが最早駄目でした。私は夢に夢見る心地でれば物も言はず、只だぼんやりと父の屍を護つて家に歸りました。其れから後の事は御話する必要がありますまい。併し私は父の死に依つて得た教訓を御話したいのです。

葬式が濟む、一と月二た月は妹が毎日泣いて居ました。私が十六で妹は十一です、父こ離れた彼女を見ると私は子供心にも妹が可愛さうで堪らなかつたです。と或る時妹は恁言ひました。

「御眞影のために死ぬのが忠義でせうか兄さん」

「無論だよ」と私が言ひました。妹は合點ゆかぬ樣に眼をぱちくりさして「でも御眞影は又作れば出來るでせう。人の生命は一度死ねば生きて來ないわ」

私は答へる事が出來なかつたです。人は氣の持ち樣で、非常に愛するものがあれば其の人の持ちものでも寫眞でも記念品でも生命に替へ難いほど愛するのだ。陛下を愛する念が深ければ御眞影も玉體も同一だといふ氣になるもので、其れほどまでに突き進んだ愛こそ本當の忠臣の愛だ。其れは或は迷信といふ人があるかも知らんが、日本人、特に父の樣な人は皇が生命なのだから、父は決して犬死ではない。恁ういふ理窟を說いて聞かしたが、あるから諒解が出來ませんでした。而して「御眞影のために死ぬよりも御父さんは世の中のためになる樣な事をなさる方が寧ろ陛下への忠義だらう」といふ樣な意味ました。子供としては餘程考へた言葉であると思ひます。

一五

私は私の考へ、即ち火事場の中で御眞影即ち玉體なりと感じた不可思議の靈感を妹に語る事が出來ませんでした。恁ういふ事が極めて精神的のもので、口に言ふ事が困難なです。

村の人達は非常な同情と尊敬を有て私達を保護してくれました。縣廳からも相當の手當を貰ひ又た有志者からも寄附金が餘程ありました。父は幾分の貯金があり住宅や地所も有て居たから私達兄妹は伯母の手元で不自由なく暮らす事が出來たのです。

火を冒して御眞影を無事に救ひ上げた少年として又た忠節なる父の子として私は何れだけ世間に賞讃されたでせう。東京の新聞も茨城新聞にも筆を盡して私の事を書きました。父や私兄妹の寫眞が掲載されました。私は此の思ひも寄らぬ賞讃に少からず驚きました。同時に私の皇室及び國家に對する熱愛が益々加はりました。私は父の如く毎日御眞影を拜みました。私は毎朝汽車に乘つて水戸の中學校へ通ひます。中學校は私を級長にしてくれました。

凡て恁ういふ風に私が段々自重心が加はり國を愛する念が深くなると共に私は自分の村を愛し村人を信じ父の遺志の如く御眞影を安全な室に置き得る樣な學校を建てたいと思ひました。

然るに日露戰爭以來日本に輸入された思想が種々な方面に極めて不健全な色を帶びて私の村の方にも流れて來ました其の上に戰爭から歸つて來た軍人共は私の村の美風を滅茶々々にしました。といふのは他でもないです。彼等軍人は自分共だけが國家のために立派な事をしたので戰爭に行かないものは國家の穀潰しの樣に思つて居るのです。これは今日でも能く軍人にはあり勝の考へで、他の人民よりも自分を一段高い地位に置きたがるのです。此の思想からして彼等は村人や其の妻や娘等をも眼下に見下しました。實際村人は戰勝の矜持に醉うて一にも軍人二にも軍人ばかりを尊敬したものです。妙な話ですが軍人なるものは普通の人よりも粗雜なもので、軍隊教育ばかりで人間としての美くしい教育を受けなかつた彼等が一心するも無理がないのです。人の妻や娘を横奪するものもあり、祝捷の酒に醉うて大て歩くものもあり、飲み倒し食ひ倒し親不孝や女房虐待など數へきれないので
は私に恁う言ひました。

「私は日本が厭な國だと思ひますわ」
「なぜだ」
「軍人が威張るから」
これは單に子供の反抗心だと許り思つて居ました。すると一と月許り經てから妹が恁う言ひます。
「どうしても日本は厭な國ね」
「なぜだ」
「活動を見ると西洋の國は綺麗で人間も嬉しさうだけれども日本の寫眞は汚くて人間が皆な暗い顔をして陰氣で仕樣がないわ」
「それは寫眞が惡いのだ、國が惡いのでないよ」
「でも兄さん、私達はどうしても日本人でなければならない人ですか、なぜ自分の好きな國の人になれないんでせう」
「日本は世界の中で一番可い國なんだよ」

私は是れ以上に説明する事が出來ませんでした。妹は折り〳〵恁那事を言ひます。其の須私の村に救世軍の一隊が參りました。赤い帽を被て太鼓を叩いて讃美歌を歌つて歩き其の後に村の子供等が跟いて行きます。私の妹は十四の年でした。彼女は此の一の一群を驚異の眼を以て眺めて居ました。

一六

「いざ信ぜよ〳〵、信ずるものは誰も皆な救はる、ドン〳〵」
恁ういふ奇怪な唄は此の村始まつて以來絶無です。男と女が一緒に唄つて太鼓を叩歩くのも初めてゞある。村人は悉く嘲笑冷罵を浴びせました。
「ヤソが來た〳〵」
彼等は新來の闖入者に對して反感と好奇心の二つを以て迎へた。御寺の坊さんが問答さして追拂つてやれといふ建議をしたものがありま
彼等は運送屋の荷物小屋を借りて説教會場としまし

貸すものが無かつたのです。荷物小屋には屋根があるが床がない。そこへ筵を敷き支に救世軍中尉太田佐久藏など、大きな紙に書いたものが掲げられました。珍らしいのを見て來やいふので村の青年等が皆聽きに行きました。私も妹を伴れて行きました。會場には名の人が集まりました。讃美歌を唄つて祈禱をして又た讃美歌を唄ひました。樂器がな婦人の人が手風琴を鳴らしました。私が第一に感じましたのは此の人達が如何にも謙遜非常な親みを有ち、來會者に對しても至極親切である事でした。一人の酔拂つた軍人が立つて大きな聲でいろ〳〵な惡口を浴びせました。其れに對して信者の婦人がにこやかで「どうぞ此方へ御入り下さい」と手を曳いて席を與へました。而して「冷水を召上りか」と訊ねました。「冷でも可いが成るべく烱の熱い奴をね、姉さん賴むよ」と軍人は婦人を撫でました。婦人は怒りもせずに、

「後で大變に美味い御酒を差上げますよ」と言ひました。

私は此の光景を見て救世軍の敬虔な態度と在鄕軍人なるもの、醜惡な品性との比較が極めて明瞭になつた樣な氣がしました。と讃美歌が始まりました。讃美歌と祈禱！私はこれが厭で堪

らなかつたのです。

「惠の光は我等がさまよふ闇路を照せり……」といふ歌でした。

病氣でもある樣な血色の惡いひよろ長い身體の人でした。說教へいふのでした。瘠せた喉から透徹る樣に朗かな聲が出ます、私段々眠くなつてぐらぐら舟を漕ぎ初めました。不圖氣が付く達は歸りました。

此夜の說教は私に何ものも與へませんでした。私は眠へ時に例の在鄕軍人が「俺に酒を飲ませると言つて何故悪た。

「日本の軍人よりも救世軍の軍人の方が可いわね」

妹は翌日も行きました。其の翌日も、

妹は基督教の信者になつたのでした。丁度、

てを打明けました。私の驚きはどんなでしたらう。

「日本は神國だ。神は即ち我々の御先祖だ。其れを信じないか」と私は懇々と言ひました。

「日本の神様よりも基督の神様は自由ですから」と妹

「自由とは何だ」

「日本の様に何でも頭ごなしに押付けるのでなく、一人々々

此の夜種々語り合ひましたが私は妹が凡てに於て私と考へ

妹は日本の凡てに反抗して居るのです。日本の道徳も習慣も

而して幼さい時から父母に分れた彼女は何物か自分の頼るべきも

一七

私の驚きよりも烈しかつたのは伯母です。伯母は早速親戚に通知しました。親戚

父が懇意にして居た人達も翌日私の宅へ集まりました。私の父と同じく長い間教師をして居た

淺田といふ老人は懇々と妹に說きました。而して基督教を捨てろと言ひました。妹は默つて一言も言ひませんでしたが終りに恁う言ひました。

「皆さんが爾仰有やるなら私は基督教を止めます」恁う言つて眼に充滿の涙を湛め「でも私淋しいわ」

と席を起ちました。私が直後に跡いて行くと納屋の壁に蝶の如く接着いて泣いて居ました。

私は是ほどまでに深い信仰を持た宗教を捨てさせるのは殘酷だと思ひましたので、

「霎時辛抱しろよ。何れお前が解る時が來るからね」と慰めました。

救世軍は村を去りました。妹は再び基督の事を口にせんでした。併し妹の態度が此時から段々變つて來

泣いたかと思へば笑ひ又た泣くといふ風でした。伯母に遣らうと言ひ出しました未だ十四の娘です。そんな馬鹿な事は出來ないと言ひまして伯母は自分も十四の時に嫁入したといふのです。併し是は其の時限りで宿題となりました

妹は裁縫が好きで手習ひや圖畫や琴や生花などまで好きであつたのです。温順で優しい女なのです。處が彼女は其等の凡てを嫌ひました。中にも古來からの淑女節婦などをば片端から罵倒し出しました。常磐御前が三人の子のために節を清盛に賣つたのが氣に食はぬ。袈裟御前が盛遠に殺される位なら何故死を決して盛遠の不心得を說破しなかつたか。親のために良人を捨てるものは卑怯で、道樂な良人に屈從してるのは詐欺であるなど、其れは〳〵殆んど古來の道德を呪ひました。或る日私は妹の机の抽出を檢べて見ました。すると小さな封筒に幾つもの手紙が入つてありました。披いて讀むとGといふ人に贈る戀文なのです。私は吃驚しました文は先方へ贈つたのか但しは下書か解りませんが、昨夜の月は紅くて血の樣であつたので貴方と二人で駱駝に乘つて沙漠の中を彷徨ひたいと思つたとか、花壇の離菊に蝶が接吻して靜かな羽根を息めてるのを見ると春の光に醉うて私の脈搏を貴方に聞かせたいのといふ極めて濃艶な文

句でした。無論其れは雜誌の惡文學から拔萃したのに違ひありませんけれども私は此のGなる男は何人であるかを知り同時に嚴しく懲らしめやうと思つたのです。で私は妹を呼び詰責しました。妹は顏を赧めて泣きました。

「兄さん酷いわ」

「何が酷い、不埒な奴だ」と私は怒鳴りました。

「何が不埒です兄さん、私が手紙を書くのに何が不埒です」

「不埒でないと思ふか馬鹿、十四の少女が戀文を男に送るとは何事だ」

「私が誰に何を送りました」

「文を男に……」

「私が送るため書いたのだと思つて？」

「送らないために書く奴があるか」

「兄さんは何にも知らないんです。私は恁ういふ手紙を書いて考へさへすれば、があつたつて無くたつて同じぢやありませんか。私にはお父さんもお母さ

を送る人も見れる人もありません。貴方方は基督を私から離してしまつたぢやありませんか私は一人ぼつちで生きて居られますか、私は此那事でもして居なければ淋しんですもの、私は御父さんに生て貰ひたい御母さんに生きて貰ひたい、誰かにしみ〴〵と私を抱て貰ひたい。基督に私の淋しい胸を撫で、貰ひたい。其れが無いんですものGであつてもAであつてもBであつても私には同じですわ。私は毎日手紙を書く間は淋しくないんですもの、其れを兄さんが餘まり酷い」

妹は聲を擧げて泣きました。

一八

父もなく母もなく、宗教も許されぬ孤獨の彼女が頭の中に假想の戀人を作つて毎日其れに手紙を出してる心根を察すると私は何んにも言へなくなりました。とは言へ十四の少女です。早くも戀を思ふとは健全な傾向とは言へません。懇々其の不謹愼を說諭しました。彼女は默つて聽いて居りました。其冬伯母が死にました。私は心を決して妹と二人で東京へ出ました遠緣の人を賴りに駒込の養鷄屋の一室を借りて妹を女學校に私は高等學校に入りました。

御承知の通り私は沈默で交際下手で外出嫌ですから私には友人といへば五郎君を二三の者より他にはないのです。然るに妹は什麼な人でも一度會つて話をすると

なります。男と言はず女と言はず彼女の友達は極めて多いのです。のみならず彼女ずる友達には絕對の愛情を捧げるのです。先方を我が所有にするか、自分を先方の

か、何れにしても全部が即ち友情になるのです。このために彼女の愛が深ければ人が壓迫を感じて彼女の手から逃げるものが多いのです。爾なると彼女は其の愛するか憎むかの二つです。此の强烈な感情は能く小說で見る南國の女にあるしは實に珍らしいです。私は自分の妹ながら不思議で堪りません。只だ私は彼一人の男を愛する樣になりはせぬかと危ぶんで居ます。彼女自らも屢た。

「兄さん、私が戀をしたら私の破滅だわ。又た私に戀される人も破滅彼女自ら其弱者を知つて居るのです。だが幸ひに今日迄は何の故障

女が好きな男があると直ぐ私に質問します。

「兄さん私はあの人を戀しても可いでせうか」

實に可笑しな話です、兄に向つて怎ういふ質問を發する者があるでせうか。併し私は

率直な純な心を尊敬せざるを得ません。

「本當に愛するならお前の全部を捧げなければならん。その決心があるか考へて見い」と私が

答へます、すると二三日經つと、

「兄さん私は全部は捧げられませんわ」

「其れぢや止すさ」

「えい止しませう」

淡然として水の如きものです。併し怎ういふ風に萬事强烈で露骨であるだけに私は一日も眼

放しが出來ないのです。私は此の儘田舍へ歸つて學校の教師をしやうと言ふけれども彼女は反

對します。彼女は私と一緒に外國へ移住して自由な國民にならうと言ふのです。

「日本人は日本のために働かなければならん」と私が言ひます。

「日本人であらうが支那人であらうが人間に差別がないから私達は人間として生きて

すれば可いのです。日本に生れたのは別に名譽でもありません」と妹が言ひます。此

題が何時も衝突します。

「私は印度人でも亞弗利加人でも可い。生命掛けに私を愛してくれる人なら嫁になり

して私は混血兒を生みます。私の兒が亦た佛國人でも獨逸人でも好きな人と夫婦にな

混血兒を生みます。爾して段々私の子孫は國籍が無くなります、本當の獨立の人間になり

まるで夢の樣な事を言つてるのです。私が朝夕心配してるのが是なのです。私は父の

繼で日本忠良の美風を保護しなければならないのに、現在の妹が此の通りでは私が第一

感化をしなければならなくなりました、處が幸か不幸か妹は戀をしました。

長い物語りを語り續けて實は雲時晶子の顏を見成つた。晶子は默つて次の言葉を待つ

日ば南下りに傾いて萬樹の影が河に流れた。蟬の時雨がさあと漲る。

「妹の此の戀こそは眞成なものらしいです。私も其れに贊成した。

……」

實は不圖言葉を止めた。彎曲した河の蘆の中から五郎と菊子の姿が現はれた。

「釣つた〳〵實に釣つた」と五郎は言ふ。

「何が釣れたかね」と實が言ふ。

「うむ、釣竿が二本釣れたよ、おまけに一本に大きな山女が引掛つて居た」

「それは私の釣竿よ」と晶子は肚を抱へて笑つた。

一九

しみ〴〵とした身の上話を聞きつ話りつした事は晶子と實の親密の度を加へた。平素に沈默な人が什麼して恁う何も彼も打明けて一家の秘密まで語つたのだらうと晶子は不思議に思ひつつも、此のために實と菊子が一層懐かしくなつた。のみならず二人の性質が明瞭と解つて來た。同じ兄妹とは言ひながら全然反對の性質である。實は謹嚴で温厚で底に熱を有て外は靜かである、菊子は輕快で多感で極めて自由主義である。

他の人達が歸り支度に掛つて居る中に晶子は一人ぶら〳〵林の中を歩いて居た。溪流が石を

嚙むで白い泡がこぼ〳〵と噴き出すかと思ふと其れが二筋三筋幾筋もの白綾となつて石の上を滑り越し碧瑠璃の青みの中へ牛乳色となつて溶けて行く、同じ事が幾度も繰返されてる間に飛沫に濡れた岸の草から生れる涼しい風と若葉を潜つて來る冷々とした風が前かいて骨の底まで冷渡る樣。夕日は木の間を潜つて緣の草間に白百合の花が白々

小圖百合を摘まうと木の間を潜り〳〵徑を辿つた。彼女は無數の百合の花の中は横を向き或は首低れ或は此の清々しい空氣を胸を張つて呼吸するかの如くけて居るのもあつた。何れを摘むにも痛々しい、切て整の朝に萎んだ姿を見たと思つた。で彼女は百合の一つ〳〵を顔に引き寄せて香を嗅いだ。清新での頭に沁み渡つた。橙紅色の花心が零れて彼女の白い指先や胸元を染めた。

を委せて居ると何とも知れぬ生の喜悅が血管に響いて來る。

といふ美しいんでせう。此の世の中は嬉しい事だらけだわ」

彼女は獨りで恁う言つた。凡て人生を美しいと思ひ、凡ての人

蟬の聲、小鳥の囀り、溪の流れ、綠の草、白い百合、崇高な青天

褊に輝いて居らぬものはない。彼女は何か唄はうと思つて兩手を胸の上で拱み殆んど思ひ設けぬ空想が突然として閃いた。

「菊子さんが誰に戀してるのか知らん」

先刻程實に聞いた時、不思議に胸が痛いた。人の戀を聞いても顏が紅くなる年頃である。

「もう少し聞けば好かつたのだが皆が來たもんだから」

自分は誰れに戀するといふ事もないが、自分と同じ年頃の友達が戀して居ると聞けば自分も何れは同じ經路を踏むであらうと思ふ樣になる、其れは處女時代の心理情態である。

「高井さんも賛成なすつた……それから高井さんの親友とすると或は兄さんかも知れない」

恁う考へ來たつた時彼女は嫣然笑み掛けた。その笑顏をその儘に微に白い齒を唇から漏らしたまゝ又た考へ續けた。

「爾だ兄さんだ、屹度爾だわ。其りや兄さんなら誰だつて戀するわ。あんな好い人はない、菊子さんが若し爾なのなら私も嬉しい、兄さんも陽氣で菊子さんも陽氣だから、まあどんなに賑やかだらう、爾なると可いわ。でも爾なると兄さんは私だけのものでなくなるわ。其れが厭だ

わ。たゞ其れだけが……」

と眼を伏せたが直に再び微笑した。

「んな事は構はない、どうせ兄さんにお嫁を貰はなきやならないんだから、他のんの方が餘程可い。その中に私も何處かへ御嫁に行くとすれば……」

と唇を閉ぢて首を傾けたが軈て「私高井さんの處へ行く樣になるかも知れの時靜かに彼女の背後に近寄つたものがあつた。

二〇

人を忍ばして晶子の傍へ寄て來たのは奥田の伜富男である。

「やあこれは御嬢樣でしたか」と富男は帽子を脱で一禮した。晶子は吃驚して刷と顏を赧めて御辭儀をしたまゝ去らうとする。

「失禮ですが御嬢樣、少々御待ち下さいませんか」と富雄は聲を掛けてもう一

「何か御用ですか」

「はい、ちよいと其のね、いやなに特に用事といふでもありませんけれども、御孃樣に御目掛つて御話を伺ひたいと思つて御邸を御訪ね致しました譯ではい」

「爾ですか、では御一緒に宅まで參りませう」と晶子は流石に禮も亂さずに言つた。

「はあ、併し何ですな百合といふものは實に美しいものですな。まあ御迷惑ですけれど御孃樣と二人で此の百合の香に醉うて詩の御話でも伺ひたいですな。無論百合は其の聖書にもある通りソロモンの榮華も野の百合に及ばずですがね一體花には花言葉と申しまして、いろ〳〵な意味がある、即ち・・・」

「いつか其の御話を伺ひました樣に思ひますが」

「はあ成程、あ、爾でしたか。同じ話を同じ人に語るのは外國では老耄の徵として在ります。私も老耄には些と早いですが、いやどうも失禮をしました。處で御孃樣・・・」

「そろ〳〵歩きませう」と晶子は迷惑さうに歩き出した。

「はあ御伴いたしませう、やあ路が惡いですな。御氣を付けなさい、貴方の美しい足の爪先でも御怪我なさると大變ですからね。豈に啻に貴方の御痛みばかりでなく、天下何れだけ心配する者が多い事でせう」

「まあ可い聲で蟬が鳴きます事」と晶子は煩さうに梢を見上げた。

「蟬ですか、蟬は日本では能く戀歌に用ゐられて居ますな、蟬と螢を秤に掛けて泣いてゐるか焦がれて去なふか・・・」

「變な歌でございますね」

「はあ、これは端歌即ち俗謠ですな、外國では蟬を嫌ひます。併し苦しい聲を雌を呼ぶためださうですな、即ち自然の要求ですかな」

「まあ雲が眞赤ですこと」と晶子は富男の駄辯を避ける樣に言つた。

「素敵！赤い雲は天軍が火車に乘て戰ひをするためだとホーマの詩にあります言寄せて燃ゆるが如き戀の歌と叫んだのは確かバルンスだつたと思ひますラスを研究して人生に喩へて居ますが人生の光は戀愛時代だとすると・・・」

「其處は崖でございますよ」

「これは難有う、御喋舌をしてる中に危なく崖から落る處でした。貴方は生命の

私は寧ろ崖から落ちた方が可かつたかも知れません。如何となれば私が落ると直て下さるです。貴方の美しい御手で私を扶け起して私の此の心臓の鼓動を貴方へその時私は一道の光が胸に射し込んだと思つて眼を開きます。貴方は私の顔をす。ビブトリスガナイトの負傷を劬はつた様に……詩です、實に立派な詩の光

「少し急ぎませう」と晶子は阪を降り初めた。

「併し」と富男は同しく肩を摺れ摺れに降りながら「私が貴方の様な高貴の方へなんて罰が當りはしまいかと思ひます」

「貴方はまあ何を仰有るの？」と晶子は餘りの追從に呆れて言つた。

「いや迚も御言葉さへ掛けて戴ける身分ぢやありませんからな」

晶子は默つて歩き續けた、と富男は猶ほも獨りで言ひ續ける。

「全く爾です、御嬢様貴方は御自身て御自分の事が御存知ないのですね」

「何ですの？」

「貴方は今の御父様が本當の御父様だと思つて被居るんでせう？」

二一

晶子は富男の言葉に呆れて顔を見戍つた。

「何を仰有るんです」

方は本當の御父様を御存知ですか什麼かを伺つただけです」と富男は狡猾さうに眼を言つた。

父様は御父様ですわ。本當も嘘もありませんわ」

では貴方は大島さんを生みの父と御思ひなんですね」

を仰有るのね」

方のために此の事を言ふのです。一家の祕密を訐くのは善い事でないかも知れません眼中には只だ貴方がある許りです。私は貴方の幸福を願ふより他に何の希望もありゝ」

父さんの子でないと仰有るのですかはゝゝゝ」と晶子は餘りの事に笑ひ出す

で種々な事を言ふものですね」
「いや事實を申上げたいのです」
「事實と仰有ると？」
「貴方は一平民大島隆二氏の實子ではありません。貴方は立派な華族の姫君です」
「夢の樣な御話ですね」と晶子は取合はず草の小徑に草履を摺る樣にして足元を見詰めながら
「隨分可笑しな話ですわ」
幼さい時から蝶よ花よと愛撫された父母を疑ふ念が微塵だにない。彼女は富男が什麼して此那事を言ふのかを不思議に思つた。
「貴方は私の言ふ事を御信じ下さらないのですね」と富男は少し中腹になつて言つた。
「そんな事が信じられますか」
「よろしい、では私がもつと明白に言ひませう。貴方の本當の御父樣は楠侯爵です」
「あら」と晶子は再び笑ひ出した。
「楠さんなの？まあ、私は侯爵の令孃なの？まあ豪いわね」

「まだ御信じ下さいませんか」
「貴方は何故、そんな事を仰有るの？」
「晶子さん」と富男は切株を指して「雫時此處に御掛け下さい。私は重大な事を御話するんですから」
「御話は御早くね」と晶子は腰を下した。
「私が何のために此那事を申上げるのかを御訊ねですね、私は申しませう。弘ま貴方パパ侯爵）血を承けながら、一平民の子として居らるゝ事を見るに忍びないからです
臣にして陸軍大將、人臣の榮を極め萬人の羨望の的に立たれて居ります。
悪く榮耀榮華望む處のものは一つとして叶へられざるものはありません
生れた人は特に輝く月日の下に生れたので婦人としてこれほどの幸福が
貴方は豐かな天の恩寵を御有ちになりながら不幸にして、十把一束の婦
は何といふ痛ましい事でせう。私は侯爵が何故に貴方を大島さんへ御與
は知りませんが、貴方と血を分けた御兄妹があの通り白日の光を浴びて

に置かれるとは實に不公平だと思ひます。人間として又實の親を知らない程の不幸まい」

「御待ち下さい」と晶子は立上つて「貴方の仰有る事は本當か嘘か私には解りません。私丈其れが本當にしても、私は今の御父さんを實の御父さんだと信ずるだけです。其れで可いのです、侯爵の令嬢である事よりも大島隆二の娘である方が私幸福ですわ」

「いや幸福ではありません。第一貴方が大島さんの令嬢であれば貴方は其れに相當の人と結ばなさらなければならない。どんな素性の卑しい者でも、例令ばあの高井の樣な男でも身分に違ひないのですからな、そこで貴方は自重なさらんと不可せん。侯爵の令嬢ですもの貴方の良人はいかにも侯爵家に相應しき上品な富裕な、そして新智識のある、幾度も歐米の空氣に觸れた、例令ば私の樣なと申しましては語弊がありますが、まあ當今の青年の中に置きましては……」

「御免下さい」と晶子はすたすたと足を急がして崖を降りた。

急雨

一

晶子が崖を降りた時、遠くの後ろから晶子を呼ぶ人々の聲が聞へて次第に此方に近付いて來た。別莊への曲り角で一同は母の松子に會つた。母は肥つた身體を大儀さうに運んで籠に充滿の河鹿を詰めたのを提げて居た。

「魚が釣れましたか」と母は訊ねた。

「山女が一尾よ」と晶子が言つた。

「何です四人掛りで以て山女が一尾？まあ何といふ下手な人ばかりだらう」と母は笑つた。

「母さんは？」

「これを御覽なさい、河鹿が此那に」

「まあ隨分澤山取れましたのね」
「お前達とは異ひますよ」
松子は餘程得意らしい。
「お母さん、雌ぢやないの？」と晶子は籠を覗いて「あら皆んな雌ですわ」
「雌は不可ないのかへ」
「雌は鳴かないのよ」
「おや〳〵」と松子は急に落膽して「半日掛つて鳴かない河鹿を取つて居たのですね。おう詰らない」
一同は笑つた。限りなき感興と親しみの中に笑ひつ語りつしながら家近く來ると、父の隆二が途中まで迎ひに來て居た。
「あら御父樣」
「大阪から今ま歸つたが、お前達のお喋舌が聞へないと矢張り淋しくてな」と隆二は帽子が無いので團扇を頭の上に載せて皆と一緒に足を返した。彼は折り〳〵晶子を見ては實を見やり又

た五郎を見やつた。そして獨り首肯いたり頭を傾げたりした。
獲物の無い釣と鳴かない河鹿狩は一家の笑ひ草となつて女中部屋までが賑はつた。
「おう暑い、未だ着替へなかつたもんだから汗だらけだよ」
と父は座敷の眞中で素裸になつた。父の癖として着物を脱ぐに一箇所に立つて脱がずに歩きながら脱ぐので、着物が束にあるかと思へば帶が西にあり、襯衣が南にあると言つた風、其の背後に從いて晶子は笑ひながら父の襯衣を脱がしてやつた。
「風呂は未だか」
「既に沸いて居ります」
女中の案内で父は裸のまゝ風呂場へ走つた。
「まあ厭な御父樣ですこと、座敷中を駈け廻るんですもの」
晶子が恁う言つたが餘りに亂雜なので單衣を衣桁に掛けやうと脱ぎ殼を拾ひ上げた。途端にひらりと落ちたものがある。一枚は封筒で一枚は手紙であつた。封筒は汗に汚れて破れて居た。手紙は舊式の卷紙で頗る大きな文字で書いてあるのが一目に解る。恁ういふ大きな字の手紙を

書くのは、楠侯爵より他にはないと晶子は思ひながら其れを封筒に納めやうとしたが、此の時不圖晶子といふ字と嫁といふ字が眼に留まつた。彼女ははつと吐胸を突いた。

「屹度私の事なんだ」

恁う思つて封筒に納めかけると汗に濡れた封筒はめら〳〵と破れるばかりで、巻紙が解けかける。彼女は暫時それを什麼しやうかと考へるもの、如く默つたが軈て思ひ切つて披いた。

「先日も申し候如く、晶子を他家へ嫁入らすよりも貴殿の嫁として五郎に妻はす事は拙者の唯一の希望にて候此の事再應御考へ被下度く候……」

晶子は吃驚してわな〳〵と身體を顫はしたが急に手紙を父の單衣の袂に入れ、逃げる樣に室を出た。彼女は實兄妹や五郎の笑聲を遠くに聞いたが、其の方へは行かずに夢の樣に自分の居室へ走つた。そしてばたりと室の眞中に坐つたまゝ吻と呼吸を吐いた。

二

「本當だつた」

晶子は漸と恁う言た時、いつの間に自分が此の室へ來たのだらうと不思議に思つた。

「先刻奥田さんの言たのは本當だつた」

藥の中から育てられた自分が、實の子でないとは什麼して思へやう。たつた一秒か二秒の手紙を讀み下す間に十九年間育てられた親が親でなくなり、兄が兄でなくなり、其代りに他人が親になつたのである。境遇と周圍の變化の迅速、白日を晦冥にする急雨よりも激しい。

「どうしたんだらう。まあ、どうしたんだらう」

餘りの事に何も考へる事すら出來なかつた。

「誰が何と言つたつて構やしない、私は御父樣や御母樣の子なんだから」

恁う繰返して見たもの、其れは單に自分の獨り言たるに過ぎないと氣が付くと、急に淋しくなつて棲み慣れた故郷から俄に別な世界に移された樣。

「私はどうしたら可いんだらう」

漸とこゝに氣が付いた。「さあ私はどうしたら可いんだらう。爾だ、知らん顔をして居れば可いのだ。此の儘默つて居れば此の家の娘なんだ」

「併し」と又考へ直す。「私を何處かへ遣る積なのかしら」

此處まで考へを辿つた時彼女は又もや吃驚して喉が塞る樣な氣がした。同時に彼女は顏を朱と染た。

「私は兄さんの嫁になる……まあ私が……まあ兄さんの嫁に？……爾うなれば私は今まで通りに此の家の人で暮せるわけだけれども、いくら何でも兄さんの嫁になられやしない。兄さんだつて其那事は……」

驚きが段々落着いて來ると、羞恥しさと、又兄妹が結婚するといふ不自然な配劑に多少の不安も感ずる。

「一體兄さんが私の事を知てるのだらうか。いや決して御存知ないのだ、して見ると私から何にも言はない方が可い。併し、併し、併し侯爵が什麼しても私と兄さんを夫婦にすると仰有つたらどうしやう」

思案に餘つて茫然と疊を見詰めて居ると大きな足音がして、兄の五郎が簾の間から顏を出した。

「晶さん、早く御出、今度は大きな魚を釣つたから」

晶子は其の方を見る事が出來なかつた。

「早く御出よ、大きな鯉だよ」

「何處で？」と晶子は顏を見せぬ樣にして言た。

「池で釣つた、はゝゝゝ」

恁う言て五郎は去た。晶子は漸と顏を上げたが火の如く赧かつた。と直ぐ小さな足音がして菊子の姿が現はれた。

「御兄さんが被居やらない？」

「今ま其方へ行きましたわ」

「あら爾？河鹿が鳴いたと思つたら雨蛙だつたのよ。直ぐ被來やいね、可笑！」

明るい顏をして黑眼がちの眼を活々と動かして恍ける樣に首を傾げたかと黑形の袂を飜して姿が見えなくなつた。其れか如何にも美しく思はれたので晶姿を見送つた。

「あの方を兄さんが御貰ひになると可いわ。あの方が兄さんに戀をしてるんだから、それが可いわ。早く爾なると可いわ」

恁う獨りで口の中で言たが、直ぐ磯と口を噤んだ。

「爾なると私は什麼なるんだらう」

三

夕飯の食卓は賑やかであつたが、晶子ばかりは何となく鬱ぎ勝であつた。餘りに急遽な身の變化に彼女の頭が充分に疲れて居た。彼女は強て其れを隠さうと努めたが直ぐ母に感付かれた。

「晶さん何處か加減が惡いの？」

「えい少し眩暈がしますのよ」

「魚釣で日に當つたからです」

「大した事でもないけれども……霎時休んだら癒るでせう」

食事が濟むと晶子は獨り居室に籠つた。晶子の不快は確かに一同の感興を減じたに違ひない

が、其れでも五郎の快活な談話は一同の氣を引立てた。菊子は食事が濟むと直ぐ晶子の室へ行つて氷枕をさしたり暇を見ては話をしたりして晶子の看護に手を盡した。獨りで何か考へて居たいと思つたのだが、菊子の親切な志を思ふと晶子は寧ろ獨りで鬱ぎ込むよりも此の方が可かつたと思つた。麻の蒲團を敷いて毛布に足を包んで半身を現はし靜かに身體を横にして居る晶子の傍に菊子は團扇で蚊を拂ひながら例の無遠慮な明晰した調子で語つた。

「私ね菊子さん、御兄さんに貴方方の身の上話を聞つてよ」と晶子は言つた。

「あら爾？何時？」

「今日魚を釣る處で」

「まあ、父の話やなんかでせう？」

「えい、隨分御二人で苦勞をなすつたのね」

「苦勞と言へば苦勞ですけれども」と菊子は起つて電燈を岐阜提灯の中に入れて元の席に坐り

「此の方が光線が柔かで可いでせう。ですが私の兄さんと來た日にや頑固過るのよ」

「私は可い方だと思ひますわ。眞面目なんですもの」

「えい、眞面目過るのよ。私とは反對よ」
「貴方は不眞面目？」と晶子は笑つた。
「不眞面目ぢやないわ。兄さんよりも眞面目の積だけれども世間で爾思つてくれないんですもの。皆が私を新しい女だと言ふのよ。だけれども新しいからつて不眞面目ではないわね」
「其れは爾よ」
「私ね、學校でね、種々な事を教はるでせう、でも其れは皆んな嘘の樣な氣がしますのよ。眞女烈婦そんなものは女を人間並に取扱はない時代の事だから今日には應用が出來ませんわ。男が放蕩しても妻が離緣を請求する事が出來ない樣な道德は道德でなくて不道德でせう」
「私も爾思ふわ。だけれども日本の女は無智だから男に馬鹿にされても仕方がないわねえ」
「無智に甘んずるから不可いのよ。家庭に入るともう讀書を止めるでせう。昔の友達を忘れるでせう。稀に會ふと料理の事や子供の自慢や家賃が上つたとかお米が高いとか其那話ばかりでせう。もつと精神的な高尚な研究的な話がないものでせうか」
「豪い氣焰よ」

「私の言ふ言葉は生者氣？」
「いゝえ」
「爾でせう？でも私が此那事ばかり言ふから兄さんに叱られるのよ。兄さん私は人類主義ですもの」
「で貴方は家庭に御入りにならないの？」
「いゝえ、私は結婚しますわ、私は本當に私の愛が燃え立たなきや結婚しなべさして貰ふためとか、早く男を捕まへて老後の準備をするとか。爾いふ詐んですわ」
「貴方は豪いわね」と晶子は心底から感歎して言つた。他人から種々に誤解せ普通の人が心に思ふても言へぬ事を無遠慮に口に出すからの事だ。嘘も僞りも は菊子さんの樣なんだ。晶子は怎う思つた時不圖菊子に訊ねて見る氣になつた
「貴方は私の兄さんを什麼思つて？」
「私？」と菊子は嫣然して晶子の顏を見やつたが直明晰と答へた。

「晶子さん、私貴方の御兄さんを愛してるのよ」

四

貴方の御兄さんを愛してると言つた菊子の眼は岐阜提灯の灯影に美しく輝いた。彼女は
も羞らう態がなかつた。が寧ろ晶子の方が微に耳根を染た。
「愛しちや不可いでせうか」と菊子は續けた。
「不可い事はないと思ひますわ」と晶子は答へた。
「でもねえ晶子さん、私には未だ愛といふものが解らないのよ、私の愛は凡ての、と異ふのか
も知れないわ。貴女は戀愛を什麼思つて?」
「私にも解らないのよ」
「爾でせう、解らないのが本當かも知れないわ。世間では學問のある人とか文章の巧い人とか
美男子とか、ちよいとした親切とか、其那人に只だ上皮ばかり心が動いて其れを愛とか戀とか
言ふんでせう。だから兩親とか親戚の人とかゞ戀愛を酷く攻撃するんですわ。私は恁う思ふの
よ。愛は宗教的なものだと思ふのよ。其の人の人格を絶對に信仰するのが愛だと思ふのよ。だ
から私は五郎さんを私の神樣だと思つて居るわ。私は昔基督教を信じた時と今度五郎さんを信
じた時と同じ心持ですもの、だけれどもね」
此處まで言つて菊子は口を噤んだ。而して肩を搖り上げて深い息を吐いた
「どうなすつて?」と晶子が言つた。
「えね、身分が異ひますから」
「して?」
「乃方は立派な家庭の方でせう私達は……」
「の御考へは舊式だわよ」と晶子は笑つた。
「よ〳〵〳〵」と菊子は直に言續けた「五郎さんも貴方も新しい人だけれども、世間が舊式
かぢね。だから私は恁う決めたのよ。愛は必ずしも結婚と伴ふべきものでない。結婚しな
も愛は愛だと決めたのよ。私は强て五郎さんと結婚しなくとも可いのですわ。私だけが愛
れば可いんだから其れが宗教的なのよ」

「そんなに兄さんを愛して下すつて？」と晶子は團扇を胸の上に置いて凝と天井を見詰めい。菊子は答へなかつた。そして再び溜息を吐いた。

「兄さんに話した事があつて？」

「ありませんわ」

「なぜ？」

「必要がありませんもの」

「どうして？」

「御兄さんが私を愛して下さるや否やは問題でせう」

「だつて兄さんだつて貴方を信じて居ますわ」

「でも私、私から其那事を言ふと誘惑になりますわ」

「ではどうなさるの？」

御兄さんの愛が起るまで待て居ますわ。其れが自由戀愛ぢやなくつて？お互ひに誘惑をしたり御世辞を言つたりして目的を遂げやうとするのはお互の自由を尊敬しない行爲ですわ。世間

の人は不義や私通などをする事を自由戀愛だと言ふけれども其れは低級な解釋よ。自由といふのはお互の意志を強ゐない事なんですわ。爾でせう」

「菊子さん」と晶子は熱心に起上つて言つた。

「私、兄さんに爾言ひますわ」

「不可せん。其れが自由でありませんわ」

「では兄さんの心持を聞いて見ませう」

「其れも不可せん。誘惑になりますから」

「あゝ貴方は本當に新しい」と晶子は染々と言た。「でも私は妹て私の意見を述べるのは構はないと思ひますわ」

「其れは貴方の自由ですわ。でも其の事に就て私には何にも言はない」

「私は屹度兄さんも喜ぶだらうと思ふわ」と晶子は獨語に言ふ持は急に晴れ〴〵となつた。

「兄さんを喜ばして上げやう。菊子さんを喜ばしてあげよう」

一人の喜ぶ顔を思ひ浮べて晶子は何とも言へぬ喜ばしさを感じた。

五

人を喜ばすことは我が身の苦痛を忘るゝ最良薬である。兄と菊子と結ばれ子は最早や我が身の上に就て胸を惱ます事がなくなつた。彼女は蒲團を滑り出して猶ほも菊子と語り續けた。

「此の人が私の姉さんになる人だ」

彼女は岐阜提灯の灯影に映る菊子の豐かな顏や美しい眼を見やつて惚れ〴〵とした。同時に菊子は晶子のふうわりとした髪から漏れる白い額や上品な瓜實顏を見やつて恁那に綺麗な方が私と姉妹になつたら私どんなに嬉しいだらう」

と胸を躍らした。提灯の光がちらちらと庭の草に映つて夜露がしとどに降て居た。裏山の方に實の詩吟の聲が聞える。

「……我琵琶を聞て既に歎息す。今此の語を聞いて重ねて啣々、同じく是れ天涯淪落の人、相

逢何ぞ必ずしも相識らん……」

「あら裏のお山へ行たのよ」と晶子は笑つた。

「まあ。あらお月夜よ」

眼を擧げて見ると眉に迫る山は晝の如く明るく一本〳〵の草木も數へられさう。星は疎らに紺碧の天が神祕の色を湛へて居る。

「秋の樣だわね」と晶子は又言つた。菊子は暫時默つて居たが軈て微に言つた。

「私ね、貴方に御訊きしたい事があるのよ」

「なあに？」

「貴方は結婚なさらないの？」

「あら今度は私の番なの？」と晶子は笑つた。

菊子はにこりともせず、「えい私既から爾思つてるのよ」

「私は未だ早いわ」

「だつて私と同じ年でせう」

「でも私は考へた事がないんですもの」
「私はね、是非貴方に御願したいと思ふのわね……」
「言はないで頂戴、私解つてるんだから」と晶子は慌てゝ制めた。詩吟の聲が再び聞え
「就中涙下る誰が最も多き、江州の司馬青衫濕ふ」
「貴方の御兄さんは好い聲だわね。何だかしみ〴〵とするわ」と晶子は耳を敬てゝ言た。
「舊式だから詩吟なんかやるのよ」
怎う言た時五郎の聲が聞えた。
「七つの峠が晴れ渡る……王様の馬は黄馬の馬、お供の馬は泥の馬……」
「調子外れよ」
「はゝゝゝ」
「ほゝゝゝ」
二人は笑つた。笑はれてるとも知らずに五郎と實は裏山の松の下に立て滿身に月を浴びて居た。

「……南朝の天子今ま何くにか在ます、芳山を望まんと欲すれば途更に」
「おい其那古臭い事は止せ。僕の新しき歌を聞け……王様の馬は黄金の」
「もう可いよ解つたよ」
「それぢや君も陳芬漢を吟ずるな」
「可し、だが君が先刻僕に話がるあと言つたのは何だ」
「うむ、話があるよ。重大な話だ。此處へ掛けやう」
二人は松の根に腰を下した。
「どんな話だ」
「僕はね、君に嚊を世話しやうと思ふよ。どうだ」
「そんな詰らない話か」と實は笑つて「未だ學生ぢやないか」
「學生だから今の中に決めて置かうと思ふんだ。でないと女といふ」
な」
「爾いふ話は止さうよ」

「いや止さん。君聞かんのか」
「聞く事は聞くよ」
「では言ふがね」
「待て〳〵」と實は制めて「僕も君に話があるよ」
「なんだ」
「君に……」と言ひ掛けたが急に悄然として「いや止さう。身分が異ひ過るか
「何を言てるんだ」と五郎は笑つて「まあ僕の話を聞け。僕の妹を君が貰つてくれ

六

妹を貰つてくれと言はれた實は半ば豫期した喜びの情と其れに伴ふ恐怖との間にさしながら「難有う」と靜かに言つた。
「どうだ貰つてくれるか」
「さあ」

「厭か」
「厭な事はないよ、あゝ無論厭な事はないよ」
「なぜぐづ〳〵してるんだ」
「大島、考へて見てくれ。君の口から其れを言ふのは餘り慘酷だ」
「なぜだ」
「僕の如き一介の貧書生が君の樣な富豪の令孃を貰らへると思ふか」
「君は實に頭が古い」と五郎は立上つて「僕は人間に妹を與れるんだよ、財産や地位に與れるんでないよ」
「其れは解つてるが併し」
「何が併しだ」
「併し君」
「おい妹はあれでもまあ美人の部に屬する方だぞ」
「無論だ」

「性質も中々可いぞ」
「爾うとも」
「申し分のない女だぞ」
「大いに爾うだ」
「それぢや併しと言ふ必要がないぢやないか」
「併し君」
「又併しか」
「御兩親は承知なさるまい」
「僕は母に爾う言つたよ」
「言つたのか」
「うむ、母は大體贊成した。父も異存かなからう」
「爾うか」と實は洋杖を地上に立てゝ、握つた拳に額を押し付けながら凝と考へたが、「矢張り不可」と唸る樣に言つた。

「なぜ不可のだ」
「厚意は謝するが君」と實は謹嚴な調子で「晶子さんには晶子さんの理想があるだらう。畢竟するに僕の目的は田舍の教師となつて日本の兒童を根本的に教育するにあるのだ。富豪の令孃が田舍教師の妻になる事は出來まい。縱令なると言つても田舍で朽ちさせるのは氣の毒だ」
「氣の毒でも構はん」
「併し當人の意向が解らないぢやないか」
「解つてるよ」
「君が訊いたのか」
「訊かんけれども解つてるよ。兎に角君は厭でない。戀をしてるか什麼かは解らんよ」
「止してくれ」と實は兩手で耳を塞ぐ樣にして「僕は戀の愛のといふ言葉を聞くと、身體がゾとするよ」
「は戀愛の話を聞くと頭が晴れ晴れするよ。兎に角僕の妹を貰つてくれ」
少し考へさしてくれ。其れよりも僕が君に御願がある。身分の不釣合は同じ、

ん、君は僕の妹を貰つてくれんか」

「菊子さん」

「うむ」と實は答へたが額から流れる汗を袂で拭いた。彼は恐る恐る五郎の顏を窺めた。而して羞かしさうに首低れた。

「恁ういふと實に厚顏かましいが僕は妹一人のために苦勞をして居るんだ。彼女は性質に缺點もあるが又非常に美しい點もある。熱情的で危險性を帶びて居ると共に統御次第で僕よりも立派な人間になり得ると思ふのだ。其れを統御するのは君より他にないのだ。妹は君に戀をして居る」

「爾うか」と五郎は眞面目に首肯いた。

「妹さへ幸福になれば僕は何の煩ひもなく充分國家に盡す事が出來るのだ。實を言ふと僕は朝鮮の田舍へ行つて朝鮮人をして充分日本の王化に霑はしめ無智な兒童を救ひたいと思つて居るのだ」

「可しッ引受けた」と五郎は快然として言つた。

「僕は菊さんを貰はう。其の代りに君は晶子を貰へ」

「其れが出來る事なら僕は」と實に言ひ掛けて「大島、實を言ふと僕は晶さんを愛してるんだ」

「其れ見い、痩我慢は言ふもんぢやない。では二人の兄が二人の妹と夫婦になつて四人の兄妹が出來る事になるね」

「僕は恐ろしい程幸福を感ずる」

と實は涙ぐむで言つた。「併し此の先がどうなるかなあ」

「取越苦勞をするな、二人には當分祕密だぜ」

「無論」

恁う答へた時、五郎は再び王樣の馬は金の馬を唄つたが實は手を額にして呻吟して居た

七

へもなく重大な事を感情で決めてしまふ事がある。親友の間柄一ふ相談も有り勝な事である。五郎が菊子を貰はうといつたのも單

であつた。

一方晶子も兄を愛する餘り、菊子と五郎の結婚を望んだ。そして二人の華やかな歡樂を想像して獨りで樂んだ。二人の若い女と二人の若い男は人生を極めて單純に考へた。勿論四人の間にはまだ戀がなかつた。極端な友情が嵩じて結婚話になつたに過ぎぬ。

併し恁ういふ話が出ない中は兎も角、一旦語り會つてから四人の間は極めて妙なものになつてしまつた。今まで五郎と菊子が差向になつて居る時に平氣であつたものが、此日から何となく氣耻かしい樣な氣がする。晶子と實も其れであつた。別けて晶子の心の中には何とも言へぬ暗い影が漂ひ初めた。其れは時として明るく時として暗く、又た時として獨りで泣きたいとも思つた。と又た什麼かすると自分の弱い氣に反抗して見たくなる。

或朝彼は泉水の澁に立て家鴨を見て居た。黄色や薄紫や純白や種々な睡蓮が一樣に青天を向いて咲いて居る、圓い葉はひた〳〵に水に浸かつて風が吹く度に水の皺と共に靜に動く、岸の日影に家鴨が集まつて居たっ白い翼の間に黄色な嘴や水搔が見えて圓い頭を並べたり羽交の間を啄んだり日向の方へ首を伸ばしたりする態が又となく滑稽である木の葉の隙を漏る日の

光は薄く白鳥の翼に綠色を抹して濡れた土の色に鳥共の爪の痕が鮮かに見られる。

「何を見てるんだい」と五郎は岩蔭から聲を掛けた。

「あら兄さん此處に居らしつたの？」

「うむ」

「いつから？」

「先刻から」

「まあ、人が惡いわね」

「お前に斷はれば可かつたね」

「あら酷いわ、何をして被居つたの？」

「僕は煩悶して居た」

「何の煩悶？」

「僕はもう此の池へ身を投げて死んでしまはうかと思ふんだ」

「あら什麼したの？」

「僕はね、失戀したよ」

「あら、どうして？」

「失戀にどうといふ理由があるか、失戀は失戀なり讀んで字の如しだ」

「だつて失戀らしくないわ」

「馬鹿言へ、顏には出ないが胸の中は實に其の、實に、失戀の極だ」

「どんな工合？」

「何となく氣が欝いで恨めしくて泣きたくて　噎が出そこなつた樣な下腹が張る樣な、背中に毛蟲が這ひ込んだ樣な」

「變な失戀だわね」

「三度の飯が咽喉に通らない」

「あら兄さんは今朝も御飯を五杯と味噌を三杯召上つたわ」

「うむ、其れは其の何だ。食事の時には失戀が休息する時がある」

「何だか本當らしくないわ」

「僕も本當らしくない」

「でも貴方は苦しいんでせう」

「うむ、苦しからうと思ふよ」

「あら、貴方の事ぢやないの？」

「僕の友人の事だ」

「まあ、兄さんは酷いわ。友人て誰方？」

「高井だよ」

「高井さん？」

「高井はお前に戀をしてるんだ」

「あら」と晶子は顏を染めて「私知らないわ」

「冗談ぢやない晶さん、高井の苦痛は僕の苦痛だ。晶さん、兄さんの御願になつてくれんか」

八

此の事あるべしとは晶子が思ひ設けぬ事でもなかつた。

「そんな話は兄さん、いやですわ」

「僕も厭だ。こんな話は御免蒙りたい。だが晶さん、早く決めないとお前は他所へ遣られてしまふ。世間の男を御覽、碌な奴がない。中にも大學に居る奴は悉く官僚臭を帶びて居る、私學校の奴は野卑で我利〳〵だ。既に職業に就てる奴は持參金付の嗅を探してる。洋行した奴は日本を掃溜の樣に思つて居る。そこになると高井ほどの人物はないよ。ねえ晶さん、お前が高井の妻になると僕だつて什麼に嬉しいか知れないのだ」

「だつて……」

「だつても糸瓜もありやしない、兄さんが惚れ込んでる男にお前が惚れないといふ法がないよ」

「でも……」

「厭か」

「厭ぢやないけれども」

「けれどもとは何だ」

「でも……」

「でもとは何だ」

「そんな事は今でなくても可いでせう」

「いや、今ま此處で返事が聞きたい」

晶子は肩を一と搖り搖つて凝と地上に眼を移しながら「兄さん、私お嫁に行くの

「どうして厭だ」

「其りや無理だわ兄さん」

「何が無理だ」

「何がつて兄さん」

恁う言つた時晶子は急に悲しくなつて袂で顏を蔽ふた。

「泣くのか」